

国際子ども図書館 の 窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く！

第16号
2016.9

表紙デザイン：熊谷 博人 氏

【写真 国際子ども図書館の活動 平成27年4月～平成28年3月】



国際子ども図書館新館完成記念式典
(平成27年9月16日)



アーチ棟外観





児童書研究資料室開室
 (平成27年 9 月17日)
 p.28



調べものの部屋開室
 (平成28年 2 月 2 日)
 p. 33
 (左)

児童書ギャラリー開室
 (平成28年 2 月 2 日)
 p. 46
 (右)



日本ペンクラブ共催講演会
「私が子ども時代に出会った本」
講師：下重暁子氏、 森絵都氏、
片川優子氏
（平成27年 4月25日）
p. 75



児童文学講演会「子どもの居場所
—アストリッド・リンドグレン
が残したもの—」
基調講演：オーサ・レグネール大臣
（スウェーデン子ども・高齢者及び男女
平等担当）
パネルディスカッション：宮崎吾朗氏、
エリーナ・ドウルツケル氏、ヨнна・
ビョルンシェーナ氏
（平成27年10月15日）
p. 74





ワークショップ「あいうえの冒険隊」

(平成27年10月11日)

p.74



講演会「イギリスの絵本作家 エミリー・グラヴェット—絵に生きる」
講師：エミリー・グラヴェット氏

(平成28年2月21日)

p.61



世界をつなぐ子どもの本—
2014年国際アンデルセン賞・
IBBY オナーリスト図書館
(平成27年 8月4日～23日)
p.73



リニューアル記念展示会「現実へのま
なざし、夢へのつばさ：現代翻訳児童
文学の半世紀」
(平成28年 3月22日～7月24日)
p.21

はじめに



第16号では、主に平成27年4月から平成28年3月までの国際子ども図書館の活動を御紹介しています。国際子ども図書館は、この数年間、新館建設を中心とするリニューアルの準備を進めてきました。平成24年2月に着工した新館「アーチ棟」は、平成27年6月末に竣工しました。引き続き既存棟「レンガ棟」の改修を行うとともに新資料室の開室準備等

を進めてきました。

9月には、「児童書研究資料室」を、平成28年2月には「調べものの部屋」、「児童書ギャラリー」を新たに開室しました。また、改修のために、「子どものへや」「世界を知るへや」を休止しましたが、3月に再開しました。平成28年6月末にレンガ棟の外壁の改修が終わり、リニューアルは終了しています。3月にはリニューアル記念の展示会を開催しました。

計画検討段階から考えますと、10年以上かかった大プロジェクトであり、多くの関係者の御理解、御協力、御尽力がなければ決して成し遂げることはできなかったでしょう。心から御礼申し上げます。

リニューアル期間中は利用者の皆様方には御不便をおかけしましたが、全面的な利用休止は行わないとの方針で臨みました。また、講演会等のイベントも開催してきました。平成28年2月にはイギリスの絵本作家エミリー・グラヴェット氏をお招きし、当館を始め、宮城県、大阪府でも講演会やワークショップを行っていただきました。

リニューアルが終わり、施設面、サービス面で充実したものになった国際子ども図書館ですが、そのことを皆様方に実感していただき、享受していただくために、今後、一層努力してまいります。

皆様からの御理解、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年9月

国立国会図書館国際子ども図書館長 本吉 理彦

国際子ども図書館の窓 第16号

<目次>



【ハイライト】

- 国際子ども図書館のリニューアルと新しいサービス =松浦 茂 3
- 国際子ども図書館拡充整備事業について
～新館「アーチ棟」増築と既存棟「レンガ棟」改修～
=国立国会図書館総務部管理課 11
- 国際子ども図書館リニューアル記念展示会
「現実へのまなざし、夢へのつばさ：現代翻訳児童文学の半世紀」
=西尾 初紀 21
- 児童書研究資料室の開室 =資料情報課 28
- 調べものの部屋の開室 =堤 真紀 33
- スマホ世代は非デジタルな情報探索を楽しめるのか
～調べもの体験プログラムが試みたこと～ =舟串 宙 40
- 児童書ギャラリーの開室 =資料情報課 46

【コラム】

- 書庫資料の移転作業 =江口 磨希 51

【国際交流】

- 第2回フィリピン国立図書館児童図書館員会議に参加して =北村 弥生 54
- 講演会「オランダの子どもの本—小さな子どもに大きなテーマを差し出すとき」—マリット・テルンクヴィスト・人と作品 =長山 さき 56
- 国際子ども図書館リニューアル記念講演会「イギリスの絵本作家 エミリー・グラヴェット—絵に生きる」 =中島 尚子 61

【平成27年4月から平成28年3月までの主なできごと】 66

【活動報告】 68

【数字で見る！国際子ども図書館】 77

【国際子ども図書館利用案内】 80

国際子ども図書館のリニューアルと新しいサービス

松浦 茂

はじめに

国際子ども図書館では、平成24年2月から増築工事を行ってきた新館「アーチ棟」が、平成27年6月末に竣工した。同年9月16日には、国際子ども図書館新館完成記念式典を開催し、多くの方々の御臨席を賜った。

アーチ棟竣工後、国際子ども図書館は、資料室・書庫資料等の移転や、既存の建物「レンガ棟」の改修（資料室跡地等の改修、施設保全改修）等を進め、順次新たなサービスの提供を開始している。9月17日には、旧第一・第二資料室の資料を移転・統合した「児童書研究資料室」を、アーチ棟2階に開室した。平成28年2月2日には、レンガ棟2階の旧第一・第二資料室跡地に「調べものの部屋」と「児童書ギャラリー」を開室した。3月1日には、改修工事に伴い休室していたレンガ棟1階の「子どものへや」と「世界を知るへや」が再開し、3月下旬には、レンガ棟3階の「本のミュージアム」と「ホール」の展示が再開した。以上により、アーチ棟及びレンガ棟の増築・改修に伴うリニューアル後の新たな来館サービスの体制が整った。なお、レンガ棟の施設保全改修（屋根、外壁等の改修）は、平成28年6月末に終了した。

1. 国際子ども図書館の基本的役割とリニューアル

国際子ども図書館のリニューアルは、大枠において、平成23年3月に策定された「国際子ども図書館第2次基本計画」（以下「第2次基本計画」という。）に沿って進められた。第2次基本計画策定の経緯は、次のとおりである。

平成12年の開館以降、国際子ども図書館は、子どもの本にかかわる大人向けの資料・情報センターとしての役割や、子どもと本のふれあいの場としての役割等を果

たしてきた。他方、その施設は、明治期以来の建物を保存改修して使用しており、書庫の満架が迫る等施設的な制約も顕在化するようになった。そうした中、平成16年9月には、施設の増設を視野において、国際子ども図書館のサービスの拡充・発展の方向性とそれに係る施設の在り方について、国立国会図書館長から、有識者の調査会に対して諮問がなされた。これを受けて同調査会から、平成17年3月に「国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会答申」が提出された。同答申を踏まえて、国際子ども図書館のサービス・施設の拡充について検討がなされ、平成23年3月に第2次基本計画が策定された。

第2次基本計画は、新館建設・既存棟改修が完了する平成27年度に実現を目指すサービスと、その基盤になる施設整備等に係る基本的な方針を明らかにするものである。国際子ども図書館の基本的な役割としては、次の3つの役割が定められた。

- ①「児童書専門図書館」：国内外の児童書及び関連資料を広範に収集・保存・提供するとともに、調査研究、研修、情報発信等を通して、児童書や子どもの読書にかかわる多様な活動を支援する役割。
- ②「子どもと本のふれあいの場」：国内外の児童書の提供、各種催物、見学、情報発信等を通して、全ての子どもを対象として図書館や読書に親しむきっかけを提供する役割。
- ③「子どもの本のミュージアム」：児童書に関する展示会やそれに関連した講演会、各種イベント等を通して、児童書の持つ魅力を広く一般に紹介する役割。

リニューアル後の国際子ども図書館では、①の「児童書専門図書館」の役割は、主に新館アーチ棟で担うことになり、②の「子どもと本のふれあいの場」及び③の「子どもの本のミュージアム」の役割については、主に既存棟であるレンガ棟で担うことになった。

2. 国際子ども図書館新館完成記念式典

国立国会図書館は、平成27年9月16日に、国際子ども図書館新館完成記念式典を挙行了。この式典には、国会、各国大使館、児童書・図書館関係機関、上野近隣機関、建築関係等、各界から多くの方々に御参加いただいた。

新館完成記念式典は、式典・テープカット、自由内覧、レセプションという構成により実施された。

式典は、国際子ども図書館レンガ棟3階ホールで行われた。大滝則忠国立国会図書館長の式辞の後、大島理森衆議院議長及び山崎正昭参議院議長から御祝辞をいただいた（肩書きはいずれも当時。以下同じ）。引き続いて、新館アーチ棟を臨むレンガ棟3階ラウンジにおいて、テープカットが行われた。

式典後には、国際子ども図書館の施設の自由内覧が行われ、アーチ棟では、2階児童書研究資料室、地下1階書庫、レンガ棟では3階本のミュージアム、1階子どもへの等を御覧いただいた。また、レンガ棟・アーチ棟間の中庭を散策する方も少なからず見受けられた。なお、式典前には、ツアー形式の内覧会も行われた。

自由内覧の後に、アーチ棟1階研修室1において、レセプションが行われた。レセプションでは、河村建夫子どもの未来を考える議員連盟会長及び細田博之図書議員連盟会長から、御祝辞をいただいた。ソフトドリンクによる乾杯の後、森茜日本図書館協合理事長、竹下晴信日本児童図書出版協会会長、黒井千次日本芸術院長から御祝いの言葉をいただいた。最後に、佐藤毅彦国際子ども図書館長が挨拶の言葉を述べた。

お忙しい中、多くの方に式典に御参加いただき、心より御礼申し上げたい。

3. リニューアル後の施設とサービス

(1) アーチ棟

ア 児童書研究資料室



児童書研究資料室

アーチ棟2階には、児童書に関する調査研究のための資料室である児童書研究資料室を開室した。同資料室は、建物上の制約から2室に分かれていた旧第一資料室及び第二資料室を統合して利便性を高めるとともに、旧資料室時代から要望の多かった日曜日の開室を

始めている。

児童書研究資料室の入室には、国立国会図書館登録利用者カードの提示等、一定の手続が必要である。開架資料は約4万冊で、日本の児童書(最近受け入れたもの)、外国の絵本、国内外の児童書に関する参考図書・研究書、現行の日本の教科書等が開架されている。読書活動推進支援に関する資料のコーナーや、当館所蔵資料を紹介する小展示のコーナーもある。以上の開架資料に加えて、請求により書庫資料を閲覧することができる。書庫資料の請求を行う利用者用端末から、資料検索、複写申込書作成や、デジタル化資料の閲覧も可能である。

資料室内にはグループ研究室と複写センターが置かれている。グループ研究室は、6名程度までのグループの調査研究に用いることが可能な個室である(予約制)。複写センターでは、国際子ども図書館の資料の複写サービスを提供している。

イ 書庫

国際子ども図書館は、児童書専門図書館として、国立国会図書館の法定納本制度等により収集した国内の児童書を所蔵するとともに、約150の国・地域の児童書及び関連資料を所蔵している。書庫は、こうした所蔵資料を保存・提供するための重要な基盤である。



アーチ棟書庫

アーチ棟は、地下1階、地下2階に書庫を備えている。書庫の書架は、一部を除き集密式であり、アーチ棟の書庫全体で65万冊規模の収蔵能力がある。従来からのレンガ棟書庫と合わせ、国際子ども図書館全体の資料収蔵能力は105万冊規模となった。

ウ 研修室1、研修室2



研修室1

アーチ棟1階には、各種研修、講演会、イベント等を行う、大小の研修室を2室備えている。研修室1は100名規模、研修室2は50名規模の収容力がある。

エ 連絡通路、事務スペース等

アーチ棟・レンガ棟間は、1階の連絡口（中庭にも通じている。）、2階の連絡通路により行き来が可能である。なお、アーチ棟3階は事務スペースとなっている。

（2）レンガ棟



レンガ棟正面

国際子ども図書館は、レンガ棟のエントランス（入口）からどなたでも入館可能であり、レンガ棟の各室も、手続なしで利用可能である。

ア 子どものへや、世界を知るへや



子どものへや

レンガ棟1階では、空調、照明等の改修工事に伴い、子どものへやが平成28年1月以降、世界を知るへやが平成27年12月以降休室していたが、いずれも平成28年3月から再開している。子どものへやは、子どもと本のふれあいの場として、主に小学生以下向けの広く親しまれてきた絵本や読み物、理解を深める知識の本を開架している。この部屋では、親子でより自由に読書を楽しめるよう、靴を脱いで本を読むことができるスペースを新設した。世界を知るへやは、世界の国や地域を知るための国内外の児童書を開架している。改修前よりも外国語の児童書を増やした。

イ 調べものの部屋



調べものの部屋

レンガ棟2階の旧第一資料室跡地を改修して開室した調べものの部屋は、国際子ども図書館として初めての中高生を対象とする部屋であり、主に中高生の調べものに役立つ資料約1万冊を開架している。この部屋では、平成28年4月から、修学旅行や校外学習のグループを対象とした、「調べものの体験プログラム」(予約制)を開始している。同プログラムでは、中高生が調べものの部屋の資料・端末を利用して「図書館における調べもの」を体験することができる。

なお、調べものの部屋からも書庫資料の請求を行うことが可能である。

ウ 児童書ギャラリー

レンガ棟2階の旧第二資料室跡地を改修して開室した児童書ギャラリーは、手に取って本を読むことができる常設の展示室である。ここでは、明治以降の日本の児



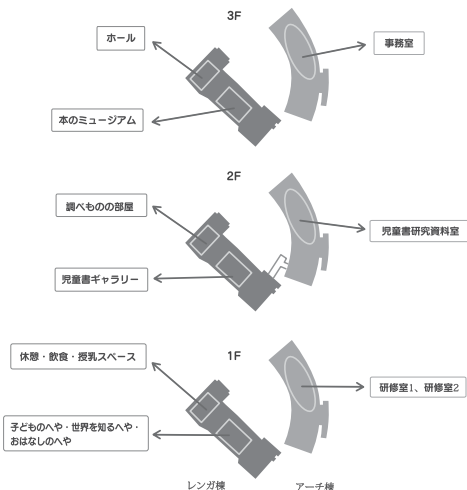
児童書ギャラリー

童文学と絵本の歩みを約1,000冊の資料でたどることができる。また、小学校の国語教科書に掲載された作品を紹介するコーナーや、児童文学作家・絵本作家の作品を紹介するコーナーがある。室内の端末からは、「絵本ギャラリー」等の電子展示会を閲覧することができる。

エ 本のミュージアム、ホール

レンガ棟3階では、内壁工事等に伴い、平成27年11月以降、本のミュージアムとホールが休室していたが、いずれも平成28年3月に再開している。本のミュージアムでは、平成28年3月22日から7月24日まで、国際子ども図書館のリニューアルを記念する展示会「現実へのまなざし、夢へのつばさ：現代翻訳児童文学の半世紀」を開催した。同展示会の後も、本のミュージアムでは順次、展示会を開催する。ホールでは、帝国図書館時代からの歴史や国際子ども図書館の活動に関する展示を行っ

ているほか、音楽会等のイベントを実施している。



レンガ棟・アーチ棟配置図

オ 休憩・飲食・授乳スペース

レンガ棟1階では、旧事務室を改修し、休憩・飲食・授乳スペースを平成27年11月から開室した。同スペースは、休憩・飲食可能なスペースに加えて、救護室、授乳室、調乳室、おむつ替えコーナー等を備えている。

おわりに

本稿では、館内の施設を中心にリニューアル後の国際子ども図書館のサービスについて述べてきた。来館サービスに加えて、国際子ども図書館は、調査研究、研修、情報発信等を通して、第2次基本計画における基本的な役割を果たしていく（1. ①～③）。そのような中で諸機関との連携の下、子どもの読書活動推進に資する事業に取り組んでおり、ホームページにおける情報発信や、研修事業の充実等の取組を進める予定である。国際子ども図書館では、こうした事業の充実にも努めつつ、「子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く！」という理念の実現に向け、サービスの向上を図っていく。

（まつうら しげる 国際子ども図書館主任司書）



国際子ども図書館拡充整備事業について ～新館「アーチ棟」増築と既存棟「レンガ棟」改修～ 国立国会図書館総務部管理課

国際子ども図書館は、帝国図書館として明治39年に建設され、昭和4年に増築された建物の増築・保存改修を行い、平成12年に部分開館、平成14年に全面開館した。

歴史的な建造物（東京都歴史的建造物に選定）でサービスを行うため、開館当初から、施設の狭隘や構造上の制約等によって十分展開できていないサービスがあり、また書庫の満架が近づいていた。このような状況を踏まえ、足掛け13年に及ぶ事業立案、企画検討、敷地に隣接する国立国会図書館上野宿舍の解体、埋蔵文化財調査、アーチ棟の増築、レンガ棟各室の改修（旧資料室・事務室の改修）から成る拡充整備事業を行い、また、平成28年6月末をもって、レンガ棟の保全改修工事が完成した。

本稿では、平成27年6月30日に竣工したアーチ棟増築を中心に、レンガ棟の改修工事を含めた、国際子ども図書館拡充整備事業について、建築の観点から紹介する。

アーチ棟の増築

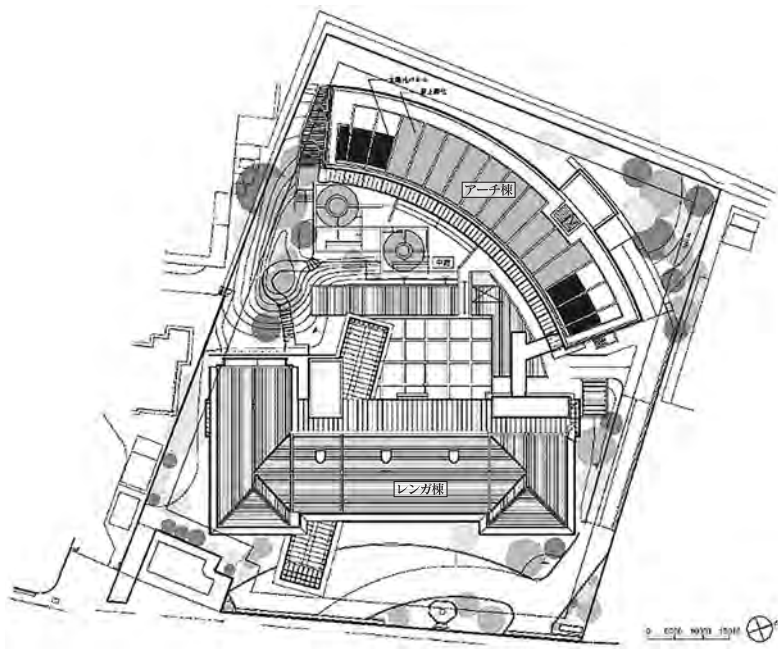
アーチ棟の増築に関する設計コンセプトと施工上のポイントについて紹介する。

1. 設計の基本方針

保存図書館としての機能、研究図書館としての機能、そして閲覧図書館としての機能、それぞれの機能を一体的に結び付けながらも、適切に分離する機能的な配置を重視した計画とした。また、敷地環境における既存の空間・歴史・環境を尊重して、アーチ棟増築を行うこととした。

2. アーチ棟配置計画

- ・明治当初の帝国図書館の計画であった中庭を持つ図書館として完成することを目指した。
- ・中庭を構成する木々は、創建時より100年近くレンガ棟と共に生きてきた図書館環境を形成する変えがたい中心核である。中庭を中心にレンガ棟と一体となった環境を創造し、利用者にとっては憩いの場として積極的に利用される計画とした。
- ・レンガ棟建物の住環境に配慮し、かつ既設の中庭や樹木の歴史を保存するため、中庭を取り囲むように、アーチ状に建物を配置した。
- ・周辺敷地の特定箇所に連続した日影を生じさせないように配慮し、また視覚的な圧迫感を与えないよう、延べ面積の60%を地下に埋没させることにより、建物の高さを可能な限り低く抑えた。



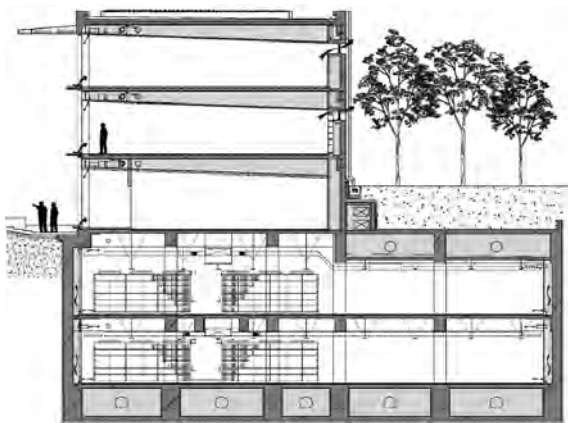
3. アーチ棟平面計画

- ・「知の探検」という視点から、緩やかに弧を描く平面がシークエンスの変化をもたらし、本のページをめくる楽しさのような知的冒険心を刺激することを企図し、伸びやかで好奇心が広がっていくような建物・空間を目指した。
- ・2階の児童書研究資料室、3階の事務室の大空間は最適なスパンを配慮した上で、安全性や経済性等を総合的に検討し、地上各階を無柱空間とすることでフレキシビリティの高い空間とした。



4. アーチ棟断面計画

- ・児童書に関する調査研究のための児童書研究資料室を2階に設け、連絡通路を介してレンガ棟からスムーズにアクセスできるように計画した。
- ・講演会等各種イベントを実施するための研修室を中庭との連絡が可能な1階に設けることで、開放感を与えるとともに野外学習等の活動が容易に行われるようにした。
- ・書庫を地下1階から地下2階に配置することで、まとまった収蔵スペースを確保し、保存書庫として安定した室内環境を保てるように計画した。



5. アーチ棟外観

- ・南側外観は、全面ガラスカーテンウォール仕上げとすることで透明性の高い、開放感のある立面とした。またカーテンウォール上部に設置した長さ3.4mの鉄

骨の大庇が意匠上のポイントとなっている。

- ・力強い形態を持つ歴史的建築物のレンガ棟とは、明確な対比構成とした。



6. アーチ棟環境計画

- ・自然換気ユニットをカーテンウォール下部に設け、外部空気を取り入れることで空調負荷が軽減できるようにした。
- ・ガラスは高断熱の複層ガラスを採用し、空調の熱負荷の低減を図るとともに、窓際にはロールスクリーンを設置し日射を抑制した。
- ・地下にはクールピットを設け、夏は地下の涼しい空気、冬は暖かい空気を利用した空調を行うようにした。
- ・屋上に太陽光発電パネルを設置し、自然エネルギーを利用する計画とした。また発電量等が分かるパネル表示盤を2階廊下に設置し、図書館利用者にも自然エネルギー利用状況が分かるようにした。
- ・屋上や敷地全体を緑化することにより、ヒートアイランド現象の緩和及び自然環境の保全に配慮した。
- ・雨水を地下ピットに集め、トイレの洗浄水等に再利用し、水道使用量を軽減できるようにした。
- ・LED 照明を採用し、消費電力を少なくするとともに、資料にとって有害な紫外線を出さないようにした。
- ・南側屋根部に大庇を設けることで、2階の児童書研究資料室、3階事務室のカーテンウォール窓際の直射日光が軽減できるように計画した。

7. 書庫の止水対策と温湿度管理

書庫の空調設備で一定の温湿度管理を行っている。また、地下に資料を保存する書庫を配置しているため、書庫へ水や湿気が入らないよう対策を施した。

- ・地下外壁を防水材により止水した。
- ・書庫の下には雨水や湧水を溜める地下ピットが設置されているため、ピット天井・壁にも塗膜防水を塗布し、書庫に湿気が上がらないようにした。
- ・外部・土に面する部分は書庫の床・壁・天井を二重化し、万が一、土に面する壁や地下構造物の天井から水漏れがあっても、書庫に水が入らないように二重壁内で排水するようにした。

8. サイン計画

分かりやすく、色彩豊かなサインとした。また英語、中国語、韓国語の多言語表記を行い、外国の方にも分かりやすいサインとした。

9. 敷地内の植栽計画

緑豊かな国際子ども図書館となるように緑化計画を行った。

- ・武蔵野の森の植生を敷地内で再生し、隣接する東京藝術大学との連続性を感じられるよう武蔵野の野草を植えた。
- ・アーチ棟建設のため解体した上野宿舍周辺にあった樹木を伐採することなく移植し保存した。
- ・東京藝術大学側の植生の下は地下書庫や敷地境界壁の底盤の人工地盤になっているため、自動で散水する灌水設備を設置し、樹木等が枯れないように配慮した。
- ・屋上緑化を行い、地上にある樹種と合わせ、敷地全体の緑化の統一を図った。



10. その他の施設

<レンガ棟・アーチ棟連絡通路>

ガラス張りの連絡通路を2階に設置した。また、連絡通路下は段差のない連絡口により両棟を移動できる。

<メイン階段>

アーチ棟1階と2階を結ぶメイン階段は建物のアーチ状の曲りに合わせ、緩やかにカーブを描いている。



＜書庫＞

地上の建物はアーチ状の曲形状をしているが、地下の書庫は必要な収蔵量を確保するため、直線形状としている。書庫にはハンドル式移動書架と固定書架を設置している。

書庫は資料の保存を考慮し、空調設備による一定の温湿度管理を行っている。また火災の際には、水ではなく窒素ガスを用いた消火設備を備える。

11. アーチ棟工事のポイント

レンガ棟と中庭の後ろ、敷地奥となるアーチ棟建設地は狭隘で、そのほとんどが地下躯体範囲となるため、工事車両等の搬入経路や工事ヤードが狭い等の制約がある中、工夫しながら工事を行った。

工事では、地上と地下において、次の工事管理を重点的に行った。

- ・ 外壁・内壁のコンクリート打放し、ガラスのカーテンウォール、建物上部の長さ3.4mの鉄骨の大庇は、歪みのないきれいな曲面仕上がりとする。
- ・ 地下に書庫が配置しており、また地下の書庫、設備室、玄関ポーチ等が地上部建物より張り出している複雑な形状であるため、書庫への止水対策として、地下外壁の防水を確実な施工とする。





レンガ棟の改修

アーチ棟完成後、レンガ棟各室のリニューアル改修を行った。

- ・ 1階の旧事務室を利用者の休憩コーナー、救護室、授乳室、調乳室、おむつ替えコーナー、ベビーカー置場からなる休憩・飲食・授乳スペースにリニューアルし、床をフローリングとすることで温かみのある落ち着いた空間とした。
- ・ 子どものへやとおはなしのへやの光天井、調べものの部屋の天井照明、世界を知るへやの家具照明を環境対策として **LED** 照明に改修した。
- ・ 利用者が1階からもアーチ棟へアプローチできるようにサブエントランス（連絡口）を改修した。
- ・ レンガ棟サインをアーチ棟サインと統一感があるものにリニューアルした。
- ・ 子どものへや、おはなしのへや、調べものの部屋、児童書ギャラリー等の各室の内装改修を行った。

本稿の冒頭で述べたように、歴史的建造物であるレンガ棟は、建設後100年以上が経過しており、平成14年の国際子ども図書館全面開館時点では健全で改修されなかった箇所等の劣化が進み、安全に関わるような外壁・屋根材の落下が数か所確認された。また明治期建物の屋根を支える木造小屋組みは創建当初の木材を活用し、平成14年に保存改修を行ったが、その後、害虫により柱・梁等建築構造木材が欠損

していることが判明した。いずれも放置したままでは状況は更に深刻化してしまうため、レンガ棟の劣化防止と安全性を確保し、また歴史的建造物を維持するため、平成27年7月から外壁・屋根の保存改修を行い、平成28年6月に工事が完了した。

施設概要

・敷地面積 7735.31m ²	・建物規模
・地域地区	<レンガ棟>
第1種中高層住居専用地域	組積（レンガ）造、一部鉄筋コンクリート造、鉄骨造
準防火地域	地上3階（書庫6層） 地下1階
第2種風致地区	（建築基準法上は地上7階 地下1階）
第1種文教地区	明治39年竣工 昭和4年増築
第3種高度地区	平成12、14年増築
緑地保全地区	建築面積 1929.58m ² （建築基準法）
・官庁施設の総合耐震・対津波基準（国等の統一基準）の耐震安全性分類	延べ面積 6671.63m ² （建築基準法）
構造体Ⅱ類	<アーチ棟>
建築非構造部材 B 類	鉄骨鉄筋コンクリート造・鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造
建築設備乙類	直接基礎、べた基礎
レンガ棟：免震構造 レトロフィット	地上3階 地下2階
アーチ棟：耐震構造	（建築基準法上は地上2階 地下3階）
	平成27年6月竣工
	建築面積 1102.67m ² （建築基準法）
	延べ面積 6184.11m ² （建築基準法）

国際子ども図書館リニューアル記念展示会「現実へのまなざし、夢へのつばさ：現代翻訳児童文学の半世紀」

西尾 初紀

平成27年9月のアーチ棟開館に引き続き、旧帝国図書館の建物であった既存のレンガ棟の改修を行って、国際子ども図書館のリニューアルは一段落した。これを記念して、1970年代以降の翻訳児童文学の展開を俯瞰する展示会「現実へのまなざし、夢へのつばさ：現代翻訳児童文学の半世紀」をレンガ棟3階本のミュージアムにて、平成28年3月22日から7月24日の会期で開催した。

展示会の企画

この展示会は、平成12年の国際子ども図書館開館時に開催した、「子どもの本・翻訳の歩み展」の続編にあたるものである。「子どもの本・翻訳の歩み展」は、明治以降1969年までに日本で翻訳刊行された児童書をほぼ10年区切りの章立てで紹介する試みで、社団法人日本国際児童図書評議会がその創設20周年記念事業として6年がかりで企画・解説執筆にあたり、外部の所蔵機関・個人からも貴重な資料の提供を受けている。この展示会の解説書の展示会企画趣旨のページには、「対象範囲については（中略）1960年代までとした。これ以後は児童文学の出版状況も大きく変わっていくためである。」と、1970年代以降を割愛した旨が記されている。

リニューアル記念展示会のテーマを、1970年代以降の翻訳児童文学と定めたのは平成24年度の後半で、展示班長を筆者¹が務めることになり、平成25年度中は、展示の構成の検討を、展示会監修者である川端有子氏²の助言を得ながら行った。

¹ 平成24・25年度は国際子ども図書館資料情報課長、平成26・27年度は児童サービス課長、平成28年度からは利用者サービス部主任司書

² 日本女子大学家政学部教授、平成24～27年度国立国会図書館客員調査員

古典的作品の全貌を俯瞰して選択して翻訳していた時代が終わった1970年代以降は、話題作がほとんどタイムラグなしに次々と翻訳刊行されるようになると同時に、国内の情勢も、オイルショックやバブル崩壊といった世相の変化はあったものの、「〇〇の時代」のように年代を区切って回顧することが難しくなった。そのため、前回の様な時系列に沿った作品紹介ではない展示構成を編み出す必要に迫られた。

1970年以降の翻訳児童文学を、原作国別に紹介する企画、または同一原作の各国語版を比較する企画も検討されたが、初期に入力された資料の書誌データには、資料及びその原書の国名・言語コードが記録されていないものが多く、これらの案は断念せざるを得なかった。

そこで、『日本児童文学』誌（日本児童文学者協会刊）の連載記事“翻訳時評”を通読して、1970年代以降の翻訳児童文学における傾向を洗い出すことにした。その結果、題材面から5テーマ（「家庭・社会の変化」、「子どもから見た大人像」、「戦争」、「忌避されてきた題材」、「盛衰著しいジャンル」）、表現面から2テーマ（「児童文学の約束事を破る動き」、「古典の新訳・新解釈」）、そして、「代表的・象徴的な作家・登場人物」を加えた8テーマを平成25年の年末までに選び出した。これを基に検討を重ね、「子どもから見た大人像」を「子ども像の展開」に変更し、「ジャンルの崩壊」については最大の躍進を見せた「ファンタジー」のみに絞り、最後の代表的な作家・登場人物については、著名な児童文学賞を受賞しているが他のテーマの章で取り上げられなかった作家の作品から選ぶことにした。

平成26年以降は、国際子ども図書館の職員によるリニューアル記念展の班を組織し、解説文等の執筆も班員が行うことにした。また、今回の展示資料については外部からの借用を行わず、国立国会図書館所蔵資料のみで構成することとし、平成25年度に決定した8つのテーマに沿って展示作品の選定を進めた。最終的な選定に当

たっては、監修者の川端氏のほか、田中美保子氏³、西村醇子氏⁴の御助言によるところが大きい。この場を借りて御礼を申し上げたい。

展示会のタイトルは、現実を直視した作品群と〈ハリー・ポッター〉シリーズに代表されるファンタジーの作品群を、この年代を代表する二大潮流と見なして、「現実へのまなざし、夢へのつばさ」とすることにした。

各章の概要

第1章 子ども像の展開

子どもを、汚れを知らない天使のような存在として描くのが一般的であったが、その内面に潜む邪悪な横顔や、大人の萌芽のようなものを暴き出す作品が現れる。主人公の役割も、かつては男の子が演じるのが一般的であったのが、女の子にも任されることが増えてくる。また、彼らが置かれる設定も、のどかなおとぎ話の世界には収まらず、冒険のレベルを飛び越え、本格的な小説のように熾烈な展開が用意されることも珍しくなくなる。

第2章 家族像の変容

家族のイメージも、両親が揃い、仲の良い兄弟姉妹がいて、といった家族像は理想でしかないものとして、両親の離婚や家族の死といった現実に向き合う作品が現れ、そんな家族をつなぎとめようとする子ども、あるいはそこから脱出しようとする子どもが描かれるようになる。その一方で、血のつながらない者同士が一つ屋根の下で暮らす新たな家族が登場し、彼らが人間関係を構築していく姿が描かれる。

³ 東京女子大学現代教養学部准教授

⁴ 翻訳家

第3章 ジャンルの崩壊

新たなテーマや表現方法の模索は、リアリズム路線とファンタジー路線の区別の縛りを乗り越えた、自由で不思議な作品となって結実する。また、^{ヤング・アダルト} Y A と称される高めの年齢層を念頭に書かれる本も増えて、子ども向けに分かりやすい表現を用いて書く、という縛りにもとらわれなくなっている。児童文学は、これまでのジャンルや読者対象の枠組みを超え、大人向けの文学とも何ら変わらない自由な広がりを見せている。

第4章 タブーへの挑戦



『クララ先生、さようなら』
ラヘル・ファン・コーイ 作
石川素子 訳、いちかわなつこ 絵
徳間書店、2014

これまで児童文学は「めでたし、めでたし」で終わるもの、そうでないものは子どもに読ませるべきではない、という考えがあった。しかし子どもたちは、貧困、病気、性、死といった現実を構成する諸要素に目をそむけたまま生きてゆくことは難しい。英米では早くからタブーとされてきた題材が取り上げられているが、同じような境遇にある子どもたちへの励ましであると評価され、多くの作品が児童文学賞を受賞し、映画化もされている⁵。このような作品の翻訳・紹介が日本でも進んでいる。

第5章 戦争への視点

戦争反対そのものをテーマにするだけでなく、戦時下の生活、戦争勃発によって起こる民族分断、戦争加担者の責任等、戦争を様々な視点から描いた作品が発表されるようになった。第二次世界大戦とユダヤ人強制収容所をテーマにした作品が多

⁵ 例えば、1990年ドイツ児童文学賞受賞、1996年映画化の『ヤンネ、ぼくの友だち（映画化タイトル「My Friend Joe」（日本未公開））』等。

いが、湾岸戦争を扱ったものや戦争後遺症を描くもの等、戦争を今も継続する国際情勢と捉えた作品もある。戦争文学は、歴史文学でも平和教材でもない、新たなアイデンティティを築きつつある。

第6章 旧作の再解釈

次から次へと新たな物語が創作される中、大団円を迎えたはずの物語の後日譚や、既存の物語の設定と登場人物を借用した新たな物語、あえて歴史上全く無名の人物を主役にした時代小説、少年ではなく少女が立ち回る大活劇等、既存の物語をベースにした、その発展系あるいは裏バージョンと言える作品が登場する。独創性に欠ける点で辛口の評価を受けることもあるが、ベースになった物語を踏まえて読めば、オリジナル作品に引けを取らない作品も多い。

第7章 ファンタジーの隆盛

1997年の〈ハリー・ポッター〉シリーズの登場とその映画化の成功により、ファンタジーは児童文学の一大潮流となり、「指輪物語」等の古典的作品が映画化されて関心を集めるという波及効果ももたらした。その後、多くの新作も登場したが、新たな伝説となるような決定打には欠けるきらいがある。ただ、ゲームのような紋切り型のヒロイック・ファンタジーに陥らず、新たな世界観を描こうとする動きが英米以外の国々からも生まれており、今後、話題作の登場が期待される。



『ハリー・ポッターと賢者の石』
J.K.ローリング 作
松岡佑子 訳、静山社、1999

第8章 1970年代以降の注目作家

これまでの7章で紹介できなかった作家の中から、ニューベリー賞(アメリカ)、

カーネギー賞（イギリス）、国際アンデルセン賞等の児童文学賞を受賞した作品を紹介する。

特別コーナー

この展示会では、これまで紹介した8つのテーマ別コーナーのほかに、特別コーナーを設けている。

日本で翻訳、紹介されるのは、英語で書かれたアメリカとイギリスの児童文学が圧倒的に多いが、その他の国で書かれ、あるいは様々な文化を背景に書かれた作品を、「さまざまな国・さまざまな文化」で紹介している。

映画やTVアニメーションによって翻訳児童文学作品が身近なものになったのも1970年代以降の大きな特色であるので、その原作本やアニメーション版のキャラクターを使った絵本等を展示するコーナー「海外児童文学のドラマ化・アニメ化」を設けた。

また、当初考えていた、同一原作の各国語版を比較する企画をひねった形で復活させた、日本の作品（上橋菜穂子の『精霊の守り人』等）の各国語訳版を紹介するコーナーを設けた。

解説・コラム・解説本

ロングセラーとなりうる古典的作品とは異なり、すでに絶版、出版社自体が解散している等入手が困難になっている本もあるため、展示解説は、字数は限られるものの、作品の評価や作家の紹介よりも内容の概略が伝わるように努めた。

また、海外児童文学を読み解くに当たって知っておいた方がよいと思われる事項や、展示用に選定した資料に描かれている内容の分析をコラムにして、各章ごとに掲示した。例えば、主人公たちの年齢と性別をグラフにして表し、英・米・独・仏・日の5か国の学校制度を分かりやすい表にして解説を加え、展示作品がどこを舞台

にしているのかを地図に記した展示作品舞台分布マップ等、視覚的に分かりやすい解説を作成した。

これらのコラムや解説文を収録した解説本⁶も作成したが、国際子ども図書館設立以前、国立国会図書館東京本館で収集された資料には表紙カバーが現存しないため、書影の代わりに標題紙部分を用いたり、また、本によっては著作権その他の事情で掲載許可が下りなかったため、書影の掲載を見送った作品も少なからずあることを御了承いただきたい。

おわりに

今回設定した8つの切り口だけで1970年以降の翻訳児童文学の全体的な傾向を把握できる訳ではないが、前回の「子どもの本・翻訳の歩み展」がきっかけとなって『図説子どもの本・翻訳の歩み事典』（2002年柏書房刊）という実を結んだように、本展もさらなる研究の足掛かりになればと願っている。

（にしお はつき 利用者サービス部主任司書）

⁶ 解説本は
株式会社 山越
〒108-0023 東京都港区芝浦3-12-6 国際芝浦ビル7階
電話 03-6435-3377（代表）
から入手できる。頒価1,800円（税込、送料300円）。

児童書研究資料室の開室

平成27年9月17日、国際子ども図書館の新館「アーチ棟」に児童書研究資料室が開室した。アーチ棟はその名のとおりのゆるやかな弧を描いた建物で、本をめくるようなイメージで設計されており、同年6月末に完成した。その2階に位置する児童書研究資料室も、建物のカーブに沿って書架や机が配置され、ガラスのカーテンウォール沿いに長く伸びた閲覧席が特徴の広く開放的な部屋となっている。児童書研究資料室は、国際子ども図書館が果たす3つの基本的な役割（1）児童書専門図書館、（2）子どもと本のふれあいの場、（3）子どもの本のミュージアム、のうち主に（1）の役割を担うもので、児童書・児童文学に関する調査研究を行うための資料室である。ここでは、この新しい資料室について紹介する。

児童書研究資料室について

アーチ棟と既存棟の「レンガ棟」を2階で結ぶガラス張りの連絡通路を渡り、自動ドアを通り抜けると、ガラス壁の向こうに広がる児童書研究資料室の入口が見えてくる。幅に比して奥行きの深い細長い部屋である。資料室の室内は、淡い緑とベージュを基調とした優しく明るい色合いで、設置された家具類も木をいかした同系色で統一されている。

従来の資料室はレンガ棟の2階にあったが、レンガ棟の建物上の制約から旧第一・第二資料室の二つに分かれていた。これらを統合し一つの資料室としたものが児童書研究資料室である。二つの部屋を統合したことで、国と地域により二つの部屋に分けて配置していた児童書や参考図書を、同じ部屋で提供することが可能となった。ほかに、複写センターは旧第一資料室に、冊子体以外の資料（映像資料・電子資料・マイクロ資料等）の閲覧席は旧第二資料室にあるという理由から、少し離れている資料室間の移動が必要な場合があったが、児童書研究資料室では、このような利用者が不便を被っていた部分が改善され、資料検索から各種媒体の資料閲

覧、複写まで全てを行うことが可能である。

旧第一・第二資料室を合わせた面積は460平方メートルであったのに対し、児童書研究資料室は650平方メートルとより広くなり、閲覧席数はこれまでより3割程度増加して54席となった。資料の検索・請求・複写申込書の作成や「国立国会図書館デジタルコレクション」の資料、契約電子ジャーナル等の利用ができる利用者用端末21台を設置している。ほかに Blu-ray Disc・DVD・VHS ビデオ等の映像資料の視聴席を設けている。



窓際の閲覧席

なお、旧第一資料室は、中高生の調べものに役立つ資料を集めた「調べものの部屋」、旧第二資料室は、明治から現代までの日本の子どもの本の歴史をたどることができる展示室「児童書ギャラリー」として、平成28年2月にリニューアルオープンした¹。

資料について

資料室内には、日本・外国の児童書に関する参考図書・研究書や、当年に国立国会図書館で受け入れた日本の児童書、約150の国と地域の絵本、国内の小・中・高等学校の現行の教科書等、約4万冊の資料を開架している。

また、各種図書館関係者や児童サービスに関わる方々に向けて、子どもの読書活動の推進に関する国内外の資料と情報を提供するために、読書活動推進支援コーナーを今回新たに設けた。このコーナーでは、主に図書館奉仕、図書館活動、児童図書館、読書論、読書



読書活動推進支援コーナー

¹ 詳細は「調べものの部屋の開室」(p.33-39)、「児童書ギャラリーの開室」(p.46-50) 参照

指導等の分類に属する国内及び外国の参考図書・研究書を開架している。ほかに、おはなし会、読み聞かせ、ブックトーク等の読書に関する活動や、児童図書館、文庫等、読書に関する施設についての資料、各自治体の読書活動推進に関する計画類も置いている。



小展示コーナー

蔵書を紹介する小展示のコーナーもあり、定期的に内容を入れ替える予定である。平成28年3月時点では、リニューアル記念展示会の「現実へのまなざし、夢へのつばさ：現代翻訳児童文学の半世紀」関連小展示及び「2015年 日本の児童文学賞受賞作品」をテーマにした展示を行っていた。入口から

近く、資料の表紙を正面に向けて展示していることから、利用者の目にとまりやすいようで、多くの方に資料を手にとっていただいている。

国際子ども図書館の所蔵する児童書は日本・外国のものを合わせて約40万冊になるが、大部分が書庫に保管されており、利用者用端末から請求して閲覧する。書庫はレンガ棟の1階を除く各階とアーチ棟の地下1・2階にあり、収蔵能力は双方合わせて約105万冊である。また、1968年以前に国内で刊行された児童向けの図書約3万冊、1970年以前刊行の児童向けの雑誌約550タイトル等はデジタル化され、「国立国会図書館デジタルコレクション」に収録されている。それらのタイトルを含む国立国会図書館のデジタル資料約250万点全てを、利用者用端末で閲覧することができる。

新しいサービス

児童書研究資料室の開室に伴い、新たに開始したサービスもある。

大きな変化としては、従来から要望の多かった日曜日の開室を開始したことである。これにより年間の開室日は50日程度増加する。



グループ研究室

また、少人数のグループでの調査研究に利用できる、グループ研究室を資料室内に新たに設けた。事前予約制だが、予約が入っていない場合は、当日でもカウンターで申し込めば利用できる。

さらに、視覚障害者へのサービスとして、グループ研究室を対面朗読場所として提供するほか、関西館で所蔵する学術文献録音資料のうち児童書及び児童書に関連する資料の、国際子ども図書館への取寄せを開始した。平成28年度中には、DAISY データの再生等が可能な視覚障害者等向け利用者用端末も導入する予定である。

旧第一・第二資料室の頃には、請求した書庫資料の到着や複写製品の仕上がりや、カウンターの職員が口頭で知らせていたが、資料室が広くなり、利用者用端末も増えたため、それらを端末の通知機能で利用者に知らせることも始めた。利用者は職員が呼ぶまでカウンター付近で待機することなく、任意のタイミングで通知を確認し資料を受け取ることができる。

開室後の利用状況

平成27年9月17日の開室から平成28年3月末までの開室日数は149日であったが、その間の来室者数は6,020人（1日平均40.4人）、うち資料利用者数は4,623人（1日平均31.0人）、見学者数は1,397人（1日平均9.4人）である。資料出納数は12,959冊（1日平均87.0冊）である。土曜日、日曜日は平日と比べると、来室者数・資料利用数ともかなり多い傾向にある。

国際子ども図書館は上野公園に近く、レンガ棟が旧帝国図書館の建物を保存再利用していること、レンガ棟・アーチ棟ともに設計に建築家・安藤忠雄氏も参画していること等から、施設見学に訪れる来館者も多い。児童書研究資料室も同様で、旧第一・第二資料室の頃より減少傾向にはあるが、資料利用ではなく施設見学を目的

に訪れる来室者が一定数見られることが特徴の一つである。

開室当初、旧第一・第二資料室の頃から利用してきた利用者からは、旧帝国図書館時代の雰囲気を残す二つの資料室を懐かしむ声も聞かれた。一方で、資料室が広くなり端末や閲覧席が増えたこと、分散していた資料が一室に統合されて使いやすくなったこと等、新しい資料室を歓迎する声も多く寄せられている。

これからも児童書研究資料室を調査研究に活用していただければ幸いである。

(資料情報課)

調べものの部屋の開室

堤 真紀

はじめに

平成28年2月2日、国際子ども図書館レンガ棟2階に新資料室「調べものの部屋」が開室した。調べものの部屋は、中学生から高校生（以下「中高生」という。）の調べものに役立つサービスの提供を目的とした資料室である。主な利用対象は中高生だが、誰でも自由に利用できる。



図1 調べものの部屋

本稿では、調べものの部屋の概要を、開室準備の経緯と合わせて紹介する。

調べものの部屋とは

調べものの部屋は、中高生が調査やレポート作成をする上で参考になる資料約1万冊を揃えた資料室である。歴史や地理、自然科学、芸術等のノンフィクション資料のほか、百科事典や各種辞書類、新聞、雑誌等を置いている。ノンフィクション資料は分野を限定せず幅広く置いているが、中でも「職業」や「部活動」等中高生の興味関心の高いテーマや、レポートで取り上げることの多いテーマについては重点的に集めている。調べものの部屋ではあるが、国語教科書に掲載された作品や文豪の個人全集等の文学類も少量を置いている。

室内には閲覧席15席、蔵書検索用端末2台、電子展示会「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典¹」閲覧用端末1台を用意しているが、本を使った調べもの

¹ 「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」
<http://www.kodomo.go.jp/yareki/index.html>

に専念してもらうため、インターネット等の外部情報源には接続していない。また、調べものの部屋では、中高生向けの「調べもの体験プログラム」を実施するための専用スペースを室内に設けている。調べもの体験プログラムとは、課題やクイズに取り組みながら図書館における調べものを体験する中高生向けのイベントで、平成28年4月から開始している²。課題を解くための資料探索は調べものの部屋の開架資料を使うため、プログラム実施日には、参加者が専用スペースと書架を行き来しながら課題に取り組んでいる。

開室準備のはじまり

国際子ども図書館では、平成12年の開館以来“子どもと本のふれあいの場としての役割”を基本的な役割の一つと位置づけ、子どもたちが図書館や読書に親しむきっかけの提供を目指してきた。来館した子どもたち向けのサービスとしては、レンガ棟1階の子どものへや・世界を知るへやでの閲覧サービスが中心だったが、この2室だけで未就学児から高校生までの幅広い年齢の子どもたちを対象とするのは難しく、中高生向けのサービスは手薄な状態であった（子どものへや・世界を知るへやでも、中学生以上向けの資料を所蔵していたが、部屋の装飾や絵本の印象が強いこともあり、中高生の利用者は少なかった）。

そこで、平成23年3月に策定された国際子ども図書館第2次基本計画³では、リニューアル後の“子どもと本のふれあいの場としての役割”に関して、“子どもの成長段階に応じた館内サービス”、さらに“資料を活用した学びの場の提示”が新たに掲げられた。そして、中学校の学校図書館における資料構築のモデルを提示し、中学生程度の調べ学習に役立つ資料を整備する資料室として「調べものの部屋」が

² 詳細は「スマホ世代は非デジタルな情報探索を楽しめるのか～調べもの体験プログラムが試みたこと～」（p.40-45）参照

³ 国際子ども図書館ホームページ「国際子ども図書館第2次基本計画」
<http://www.kodomo.go.jp/about/law/basicplan2.html>

明記された。調べものの部屋の開室準備はこうして開始された。

学校図書館の蔵書構築調査

中高生向けに特化したサービスや学校図書館の蔵書構築は、国際子ども図書館にとって初の試みであったため、開室準備期には学校図書館の見学や外部有識者からのヒアリングを行い、資料の選定や配列等について多くの助言をいただいた。

平成24～25年度には、「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」⁴を実施し、計10校の学校図書館を対象に訪問調査やデータ分析調査を行った。その結果は、『学校図書館におけるコレクション形成：国際子ども図書館の中高生向け「調べものの部屋」開設に向けて』（国際子ども図書館調査研究シリーズ第3号）⁵にまとめられている。

複数の学校を調査した結果、資料選定の方法もその結果出来上がった図書館の蔵書構成も、学校により異なることが明らかとなった。調査対象とした学校図書館では、読書推進活動に留まらず各種のレポートや調べもの等の探究活動に積極的に関与しており、それらの活動の中で取り上げるテーマの資料を多数集めていた。そのことが各校の図書館の蔵書の個性に繋がっているものと推察された。

調べものの部屋の資料は、中学校の学校図書館平均所蔵冊数⁶に合わせて約1万冊と設定していたが、これらの結果を受け、その1万冊という枠の中で万遍なく全分野の資料を収集するのではなく、あえて分野によって濃淡を持たせることとした。

⁴ 国際子ども図書館ホームページ「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」
<http://www.kodomo.go.jp/promote/school/room.html>

⁵ 『学校図書館におけるコレクション形成：国際子ども図書館の中高生向け「調べものの部屋」開設に向けて』（国際子ども図書館調査研究シリーズ No.3）国立国会図書館国際子ども図書館編，2014．<http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8484023_po_2014-series.pdf?contentNo=1&alternativeNo=>>

⁶ 平成25年調査における中学校図書館の平均蔵書冊数は10,971冊。（全国 SLA 研究調査部．2013年度学校図書館調査報告．学校図書館．2013，No.757，p.41-61＜請求記号 Z21-148＞）最新の調査結果は全国学校図書館協議会ホームページに掲載。
<http://www.j-sla.or.jp/material/research/2008-2.html>

すなわち、中高生がレポート等でよく取り上げるテーマや興味関心の高いテーマ、当館の特性を生かしたテーマを絞り、その分野の資料を重点的に収集する方針となった。

資料を集める

分野に濃淡を持たせることとしたが、来館者の調べものに対応するためには幅広い分野の資料が必要である。まずは、広く浅く中高生の調べものに役立つ資料を収集した。本の選定に当たっては、各種目録（『学校図書館基本図書目録』⁷、『学校図書館・速報版』⁸等）や新刊案内情報、上記プロジェクトの調査協力校での蔵書データ等を使用して候補リストを作成した。また、国際子ども図書館では納本制度によって国内で刊行された児童書を網羅的に所蔵しており、新刊分は資料室に開架しているので、これらにも目を通し調べものの部屋資料候補を選定した。中高生の調べものに耐えるという観点から、児童書だけでなく一般書も多く含めるように心掛け、ビジュアルで把握できるような図表や解説の豊富な資料を優先し、様々な切り口から調べられるように配慮した。

重点的に収集する分野

中高生の興味関心や当館の特性を検討した結果、音楽やアニメーション等の「文化」、キャリア学習に使われる「職業」、「部活動」、「自然科学」、「戦国時代」、「国際理解」、「探究活動（調べもの）」を重点的に収集する分野に設定し、さらに当館の立地する地域「上野」を追加した。上野公園周辺には、国立科学博物館や国立西洋美術館等の文化施設があり、修学旅行や校外学習で多くの中高生が訪れる。国際子ども図書館に来館する中高生も、校外学習や修学旅行等を目的とした生徒が多い

⁷ 学校図書館基本図書目録．全国学校図書館協議会，年刊（現在休刊中）＜請求記号 Z45-47＞

⁸ 学校図書館．速報版．全国学校図書館協議会，半月刊＜請求記号 Z21-188＞

ため、彼らが近隣施設で興味を持った事柄や展示についてこの部屋で調べるという利用方法を期待している。

「文化」や「戦国時代」、「上野」の資料選定に当たっては、想定されるキーワードを洗い出し、各キーワードを知るために有用な資料を選んでいく方法をとった。例えば「上野」では、「国立西洋美術館」等の関連施設名、歴史的な側面から「徳川家」「彰義隊」、上野公園に関連して「西郷隆盛像」「桜」等のキーワードを設定した。それに基づき資料を選んだ結果、『ル・コルビュジエの国立西洋美術館』⁹、『大江戸幕末今昔マップ』¹⁰、『東京の銅像を歩く』¹¹等様々なジャンルの資料が集められている。

資料の分類

資料の配列は、学校図書館や公共図書館で一般的に使われている日本十進分類法（NDC）に基づく請求記号順とし、請求記号は NDC 3 桁のみの形式を基本とした（例：地震学に分類される資料→「453」）。請求記号に著者名や書名の頭文字を追加する方法もよく見られるが、調べものの部屋では、探している本の周辺にも自然に目を配れるようにと考え、敢えてシンプルな形式を採用している¹²。重点的に収集した分野の資料群は、その分野の単位でまとめて配置することはせず、それぞれの資料の内容に応じた分類を付して並べることとした（ただし、上野関連資料は一か所にまとめて展示）。職業の資料群や伝記類は、各職業の内容、各被伝者の業績に応じた分類を付けた。なお、百科事典や辞書等の参考図書、上野関連資料、教科書掲載作品は別体系の記号を付け、専用の棚に配置している。

⁹ 藤木忠善、ル・コルビュジエの国立西洋美術館、鹿島出版会、2011<請求記号 KA321-J8>

¹⁰ かみゆ歴史編集部、大江戸幕末今昔マップ、新人物往来社、2012<請求記号 GC67-J363>

¹¹ 木下直之、東京の銅像を歩く、祥伝社、2011<請求記号 GC65-J92>

¹² NDC 9 類の資料のみ、著者名の頭文字を追加した体系とした。また、日本地理等の一部分類では、NDC 4 桁目を使用している。

室内のレイアウト

調べものの部屋は、入口側にテーブルやスツールの配置された広い閲覧スペースがあり、新聞（中高生向け新聞2紙、一般紙3紙）、雑誌や前述の資料検索端末や電子展示会閲覧用端末を設置した。部屋の壁面と奥側に資料の並ぶ書架があり、閲覧スペースに面した書架では、「上野関連資料」と「図書館での本の探し方」という2つの小展示を行っている。「図書館での本の探し方」の展示では、分類記号の読み方や本の配

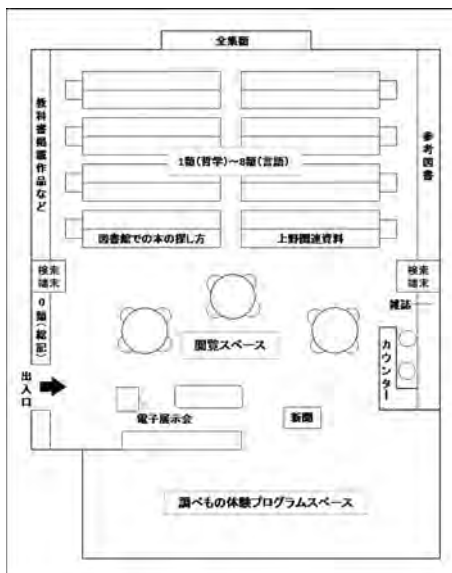


図2 室内レイアウト

列を解説し、NDC 分類を0～8類の資料例とともに紹介している。この展示によって図書館の使い方を知り、調べものの部屋の書架をめぐることで、あるテーマの資料も切り口によって別々の分類にあることに気づいたり、書架から予想外の繋がりを見つけたりすることを期待している。

入口直近の壁面の書架には、NDC 分類の0類（総記）の本を並べている。資料を配置し始めた当初は、手に取りやすい教科書掲載作品を置く予定だった。しかし0類には、調べもの、情報検索、図書館に関する本が多く含まれており、これらは調べものの部屋のコンセプトそのものであるため、入口に近い書架に並べるよう変更することとした。



図3 小展示（図書館での本の探し方）

NDC 1～8 類の資料は、自立型書架に配置しており、各分類の冒頭には、それ



図4 各分類の解説文（1類）

ぞれの分類を分かりやすい言葉で解説したパネルを置いている。

※調べものの部屋に置いている資料は、インターネットから「国際子ども図書館子ども OPAC」¹³を用いて検索することができる。

おわりに

調べものの部屋にあるノンフィクション資料は時代が進むにつれてデータや内容が古くなるため、多くの分野で資料の入替えが必要になるほか、開室に当たり設定した重点的に集める分野についても、中高生のニーズや社会情勢に基づいて見直しが求められる。来室する中高生や調べものの体験プログラムへの参加者を通して、彼らや学校現場のニーズを知り、資料の更新や部屋のサービスの改善に役立てていくことが今後の課題である。

パソコンやスマートフォンでの即決型の検索に頼りがちな中高生が、この部屋の蔵書や調べものの体験プログラムを通して、調べることの楽しさや奥深さを感じ、複数のものごとの繋がりに気づくこと、調べる過程で予期せぬ知識と出会うこと、これが調べものの部屋の目指しているサービスである。調べものの部屋は、入室手続なく自由に利用できる。教育関係者や図書館関係者だけでなく、中高生の家族に薦める本を探したい方、偶然上野地域に観光に来た方等1人でも多くの来館者がこの部屋に立ち寄り、書架をまわって本を手にとってくださることを期待している。

（つつみ まき 児童サービス課）

¹³ 国際子ども図書館子ども OPAC <http://iss.ndl.go.jp/children/top>
トップページにて「調べものの部屋の本」を選択すると検索が可能となる。

スマホ世代は非デジタルな情報探索を楽しめるのか ～調べものの体験プログラムが試みたこと～

舟串 宙

はじめに

国際子ども図書館は、国立国会図書館全体としても初の試みとなる、中高生向けの資料室「調べものの部屋」¹を、平成28年2月に開室した。この部屋では、面積の約1/3を、「調べものの体験プログラム」専用スペースとしている。

「調べものの体験プログラム」は、中高生が課題やクイズに挑戦しながら、図書館における調べものを体験するものであるが、平成27年度から試行をし、その評価を踏まえ構成・内容を見直して、平成28年4月から正式に開始した。中高生がにぎやかに調べものの部屋の書架を探索し、資料を持ち寄って解答を競い合う光景が日常的に繰り広げられており、静謐な環境下で読書を楽しめる場所という、図書館の一般的な通念からすると、かなり異例の環境といえよう（図1）。いったい国際子ども図書館は、この「調べものの体験プログラム」を通じて、何を目指しているのか、本稿ではその特色に触れながら述べることとする。

1 誰を対象とするのか

「調べものの体験プログラム」の企画段階で、まず検討したのは主なターゲットとなる利用者像の明確化である。活字離れの世代と呼ばれ、「調べ

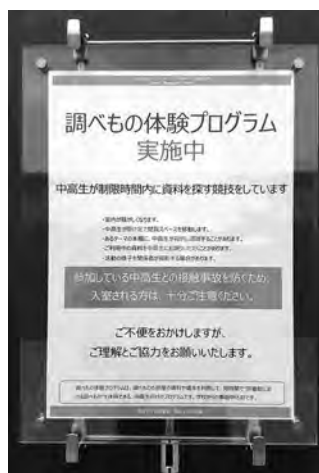


図1 調べものの体験プログラム実施中の看板

¹ 国際子ども図書館ホームページ「調べものの部屋」
<http://www.kodomo.go.jp/use/room/teens/index.html>

る」という行為がスマートフォンに代表されるモバイル機器を通じて得られるデジタル情報探索とほぼ同義となっている年代に対し、図書館で調べものを体験できるイベントをただ提示したところで、足を運んでもらえるものではない。ではいかにして呼び込むか。

国際子ども図書館は、上野公園に隣接した場所に位置しており、国立科学博物館や東京国立博物館といった文化施設に囲まれている。この立地条件からして、来館者の大半を国内外問わず観光客が占めているのは容易に想像がつくが、中学生も同様であり、上野公園界隈で見かけられる大部分は、遠方からの修学旅行生か、近県からの校外学習生である。これらの中学生たちが上野公園にまで来ているのだから、あとは訪問先として、国際子ども図書館まで足を伸ばしてもらえばよい。ターゲットは、修学旅行生と校外学習生に絞り込むことにした。

これまでも、国際子ども図書館には、平成12年の開館以来、今日に至るまで、多くの中高生が訪れている。しかしこれは「国立の子ども図書館」という物珍しさと、保存改修された明治期の建築物を見学するという観光目的によるものが大半であった。美術史上の名品や、巨大な恐竜の化石を有する近隣施設に比べれば、いかんせん図書館では地味な印象は拭いきれない。国立科学博物館や東京国立博物館、国立西洋美術館といった強い訴求力を持つ機関が割拠するなか、あえて国際子ども図書館を選んでもらう動機作りが求められる。修学旅行・校外学習先を手配する学校の先生方にアピールする要素とは何か。それは「気軽さ」と「新しさ」ではないかと考えた。

「気軽さ」で考慮したのは、図書館という施設が持たれがちな固い・敷居が高いといったイメージを払拭すること、参加する生徒側の事前準備は不要とし、1日とはいえ校外での貴重な時間に、他の訪問先にも立ち寄れるようプログラムを短時間に濃縮する、といった要素である。校外での体験なのに、学校の授業の延長であるかのような学習色を強めてしまうと、生徒の積極的な参加は見込めないし、かといっ

て敷居を低くし過ぎて、一過性の行事にまで薄めてしまうと、その場では盛り上がりを見せても、生徒各自には何も残らない結果に陥りかねない。中高生の興味を喚起する「柔らかさ」と、慣れない文献探索であっても中高生が挑戦しうる程度の「困難さ」のバランスをとり、最適なレベルを探ることに注力した。

「新しさ」については、これまで国際子ども図書館では行っていなかった内容にするのはもちろんのこと、当館や調べものの部屋の蔵書の特徴を活かしプログラムの素材とする、対戦やタイムトライアル等ゲーム的な要素を付加するといった工夫を試みた。参加する中高生の集中力を維持し、興味を喚起し、校外での非日常的な体験を楽しんでもらいながら、生徒各自が何らかの成果を得て学校に持ち帰ることができること。つまり、生徒の反応をみた先生方が、来年もまた申し込もうと思ってもらえるような仕組みづくりを目指した。

2 何を体験するのか

単純に「面白そう」と思ってもらえれば予約申込みは見込めるし、実際に「面白い」と思ってもらえれば再度の利用にもこぎ着けられる。ただ、一口に中高生といっても、13歳から18歳までの成長期に当たり、能力面での個人差はもちろん、興味の範囲も様々である。平成27年4月からの試行では、学力からは推し量れない、学校ごとのカラーやクラスの雰囲気、参加するグループ構成員の体調ややる気次第で、当日のプログラムの成否が左右される傾向が顕著であった。そこで、「図書館における調べものを体験する」という



図2 調べものの対戦コース実施の様子

大前提は崩さないまでも、多様なニーズに対応できるよう、テーマ設定や方式にバリエーションを持たせ、結果として計6つのコースが誕生することとなった(図2、

図3)。ひとつひとつのコースの説明は割愛するが²、組立ての過程で、前述の「気軽さ」と「新しさ」を具体化したものにするべく、留意した点を述べる。

第一に、ネット検索との対比を重視した。図書館で書架を探索し、紙のページをめくって調べる行為と、中高生が日常的にモバイル機器を用いて行っている検索とを常に比較・対照する視点を組み入れ、双方の類似点と差異を際立たせ、参加者に意識させることを試みた。日々スマートフォンやパソコンから情報を摂取している中高生にとっては、問いと解が瞬時に結びつくネット探索の特性そのものが、情報探索とほぼ同義と捉えられている。この固定概念をまず払拭し、探索の過程を意識的に観察し、紙資料の探索へと結びつけてみた。



図3 調べものクイズコース実施の様子

第二に、職業体験の要素を付加した。これまでも国際子ども図書館では、職場体験として毎年中高生を受け入れてきたが、断片的かつ機械的な作業を一部経験してみるだけでは、参加者のやる気を喚起できず職業理解も深まらなかった。図書館におけるレファレンス業務を体験するという意味合いで、「調べもの体験プログラム」では、チーム対抗で課題の作成と解決に取り組み、スピードや精度を競う方式を採用した。

第三に、実生活との関連づけを試みた。調べものの部屋の資料は平成24～25年度に実施された中高生の主たる関心事項についての調査³に基づいて構成されているが、重点的に収集された分野のひとつに「部活」がある。これらの資料を活用する

² 国際子ども図書館「見学・体験（中高生向け）」＜<http://www.kodomo.go.jp/use/tour/youth.html>＞を参照いただきたい。

³ 『学校図書館におけるコレクション形成：国際子ども図書館の中高生向け「調べものの部屋」開設に向けて』（国際子ども図書館調査研究シリーズ No.3）国立国会図書館国際子ども図書館編，2014．＜http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8484023_po_2014-series.pdf?contentNo=1&alternativeNo=＞

ため、参加者が現に取り組んでいる部活をテーマに課題を探すコースを設けた。図書館における調べものを、理念的な学習の延長上ではなく、日々の生活の延長上に捉えてもらうことを狙った。

第四に、「国際」子ども図書館の特色ある資料を活用した。その名の通り、国内の他の図書館には所蔵されていない外国の絵本や児童書を有する強みを活かし、アラビア語やロシア語といった、一般的な中高生には馴染みの薄い言語の絵本を用い、絵だけでストーリーを創作し、チームで作り上げるというコースを設けた。これを図書館における「調べもの」の一種と位置づけるには難があるのだが、中高生が互いの想像力の差異や同質性を意識する手法として有効であり、試行段階でも好評だったので、採用することとなった。

おわりに

平成28年4月から始まったばかりの「調べもの体験プログラム」だが、幸い本稿の執筆段階では、順調に回を重ね、好評を博している。参加いただいた学校には、事後的にヒアリングを行い、各コースの見直しや運営上の改善に役立てている。

なお、「調べもの体験プログラム」は、全コースの具体的な実施方法や調べものに関する説明資料を、平成28年4月の運営開

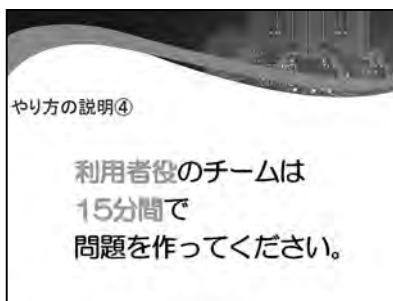


図4 文献探索コース説明資料の一部

始当初からホームページ上で公開している(図4)⁴。公開の意図としては、国際子ども図書館への中高生の来館機会の拡充の狙いがある一方、この取組を全国へ発信し、各学校でも同様の取組を行っていただき、図書室へと生徒を呼び込むツール

⁴ 前掲注2 <<http://www.kodomo.go.jp/use/tour/youth.html>>

として活用いただくことも企図しているからである。著作権云々は問わないので、学年や学校の特徴に合わせて適宜アレンジを加え、是非お試しください。

(ふなくし ゆう 児童サービス課)

児童書ギャラリーの開室

平成28年2月2日、レンガ棟2階に児童書ギャラリーが開室した。児童書ギャラリーは、明治から現在までの日本の子どもの本の歩みをたどる常設の展示室である。児童書ギャラリーがある部屋は、明治39年に建てられた部分にあり、当初は特別閲覧室として、その後は図書出納室や書庫として利用されていた。明治時代から図書館の閲覧室として利用されていた部屋に、建物が見てきた日本の歴史とほぼ同じ時間の子どもの本を、歴史をたどりながら閲覧もできるギャラリーとして開室したことは、偶然ではあるが、不思議なつながりが感じられる。

また、この部屋は、国際子ども図書館が開館してから平成27年8月末まで、第二資料室として、主にヨーロッパやアフリカ、アメリカ等の絵本や研究書等の洋書を開架していたところである。リニューアルに当たり、床のカーペットをグレー系から明るいベージュに変更したほかは、書棚や机、椅子、照明等、旧第二資料室のままである。

ここでは、児童書ギャラリーの展示概要と、開室後の利用状況を紹介する。



展示会「日本の子どもの文学」から

当館では、平成23年2月19日から平成27年10月31日まで、日本の児童文学の流れを概観できる展示会「日本の子どもの文学―国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」を開催した。全1,348日という、当館史上最長の会期を誇る展示会となった。総入場者数は256,085人、1日平均190人であった。長期間の会期中、入場者数はほぼ一定の数を保ち続けた。

レンガ棟3階本のミュージアムで開催する展示会では、資料をガラスケースに納めて展示する。そのため、展示会の会期中は資料の閲覧はもちろん、図書館間貸出や遠隔複写サービスに提供することができなくなってしまう。また、同じ資料を長期間ガラスケースに入れて展示し続けることは、資料劣化の要因ともなる。

「日本の子どもの文学」展は当初から長期間の会期を予定していた。そこで、資料の利用提供と保存の観点から、可能な範囲で展示用資料の入手を行った。この展示用資料として集めた資料の会期終了後の活用方法について、館内で検討していた。

一方で、この展示会のアンケートでは、「懐かしい」「手に取って見たい」という要望が多く寄せられ続けた。そこで、キャプションや表紙のみでは伝えきれない本の魅力を、より深く解することができるよう、“本にさわれる”展示室を開室することとなった。



展示構成

児童書ギャラリーの開室に当たり、帝国図書館時代の優美な内装に合わせて作られた、旧第二資料室の固定書架等の家具は、これをそのまま生かすことにした。

書架が室内の左右に2列あることから、日本の子どもの本の歩みを「児童文学史」と「絵本史」の2本立てにすることにした。監修は、児童文学史については「日本の子どもの文学」展に引き続き、宮川健郎氏（武蔵野大学教授）に依頼した。絵本史については、この展示会の特別コーナー「21世紀の絵本1」を監修していただいた、広松由希子氏（絵本作家・評論家）をお願いした。

前述の展示用資料のほか、すでに入手が難しく、デジタル化されている明治から昭和30年代までの資料については、室内に設置する閲覧端末から国立国会図書館デジタルコレクションを閲覧するように案内することとした。こうして約1,000点の資料を展示するギャラリーが誕生した。



展示構成は次のとおりである。

<絵本史>

- 第1章 明治から大正まで 黎明期の絵本
- 第2章 大正から戦前まで 童画の時代
- 第3章 戦後から1950年代まで 現代絵本の出発
- 第4章 1960年代から1970年代まで 絵本黄金期
- 第5章 1980年代から1990年代まで 個と表現の追求
- 第6章 21世紀の絵本 新しい希望のかたち



<児童文学史>

- 第1章 子どもの文学の始まり
- 第2章 『赤い鳥』創刊から戦前まで—「童話」の時代
- 第3章 戦後から1970年代まで—「現代児童文学」の出発
- 第4章 1980年代から1999年まで—児童文学の現在
- 第5章 21世紀の児童文学

<国語教科書と児童文学>

小学校の国語教科書に掲載された作品を、現在使用されている国語教科書と共に展示している。

＜子どもの本の研究書＞

子どもの本の歴史を学ぶのに役立つ参考書を紹介している。アーチ棟2階の児童書研究資料室の開架資料とあわせて利用していただきたい。

＜作家・画家コーナー＞

児童書ギャラリーの奥に、テーマ展示の場所を設けた。年に数回の展示替えを予定している。開室時点では赤羽末吉を特集しているが、順次代表的な児童文学作家や画家を取り上げていく予定である。

＜電子展示会＞

リニューアル前にレンガ棟3階ホールで提供していた「絵本ギャラリー」や国立国会図書館国際子ども図書館の各種「電子展示会」を、児童書ギャラリー内の閲覧端末で閲覧することができる。これらのコンテンツは、国際子ども図書館ホームページでも、一部を除き公開している。

開室後の利用状況

“本を手にとって読める”展示は好評で、開室当初から、週末を中心に多くの方が楽しんでくださっている。児童書ギャラリーの天井や柱の美しい歴史ある漆喰装飾とも相まって、日本の子どもの本の歩みをゆったりと感じる落ち着いた部屋として利用いただけているようである。外国の方も多く来室し、明治年代の日本の絵本や児童書に興味を持つ方が多い。

児童書ギャラリーは今後も毎年少しずつ、新しい子どもの本を追加していく予定である。子どもの本はこれからどのような歩みを見せてくれるのか、私たちも楽しみにしている。

(資料情報課)

書庫資料の移転作業

江口 磨希

平成27年国際子ども図書館に新館「アーチ棟」が誕生し、それまでは第一・第二資料室と二つに分かれていた資料室が一つに統合され、アーチ棟2階に児童書研究資料室としてリニューアルオープンした。同時に、それまで既存棟「レンガ棟」の書庫2層から6層（収蔵量40万冊）に収納されていた約40万冊の資料のうち約9割がアーチ棟地下1階・2階（収蔵量65万冊）に作られた新しい書庫へ移転した。

もともと帝国図書館だった建物を改修して平成12年にオープンした国際子ども図書館は、一部の資料を永田町の国立国会図書館東京本館の書庫に送付・仮置きしたにもかかわらず、平成27年には40万冊規模の書庫がほぼ満架になっていた。

割付図の作成

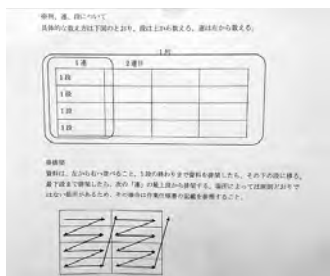
書庫資料の移転準備として、平成26年度から新しい書庫の割付図作成に着手した。割付図とは、書庫にある各資料を新しい書庫のどこに移動させるのかを図面に表したものである。

まず、現状調査として、30万冊を超える資料について資料群ごと（児童図書、児童雑誌等）、そしてその中の細かい分類ごと（絵本、読み物等）に、現在どのぐらいの資料が書架を占めているか実測・計算し、その長さを **cm** 単位で出した。さらに今後10年間に入ってくる資料を収めるのに必要な書架の長さを、これも分類ごとに予測して、計算した。国内で発行された全ての出版物は、国立国会図書館に納められるよう義務づけられているが、国立国会図書館ではそれを現在と未来の読者のために長期保存している。国立国会図書館の支部図書館である国際子ども図書館はこのうち児童書を収蔵しており、所蔵資料は増加する一方である。

その後、新しい書庫の建築用設計図から書架の棚幅・棚数等を読み取って詳細な書庫図面を作成し、資料ごとの配置を定め、分類ごとに、現在の書架の長さに今後

10年間に必要な書架の長さを加えて「この分類はこの棚からこの棚まで」というように記入していった。特に雑誌は1つのタイトルが継続して出版されるので、タイトルごとに同様の作業を行った。ちなみに平成26年度末時点の日本語の児童雑誌の所蔵は約1,500タイトル（刊行終了したものも含む。）であった。

書庫内の書架への表示



次の作業は、その割付図を基にどの資料がどこに行くのかを書架に表示することである。実際に資料を移転するのは運送業者だが、必ずしも図書館資料の移動に経験があるわけではないため、誰が見ても分かるような表示を心掛けた。

まずは資料の並び順。「資料は書架の左から右、上から下に並んでおり移転先でもそのように並べること」という表示を、移転元・移転先の書架にしつこいぐらいに貼った。図書館員にとっては当たり前のことだが、そうでない人にとっては必ずしも当たり前ではないという事例をいくつも聞いていたからだ。少数だが移転しない資料の書架には「移転しない」の表示を全てに貼り、さらに資料を書架から取り出せないように紙テープを「×」印に貼った。移転に際してはこれらの表示が実際少なからず役に立った。

また新しい書庫の書架に番号をつけ、どの資料が新しい書庫のどの番号の棚に移転するのかを引越し用ラベルに書いて貼った。移転先にも同様のラベルを貼った。移転の際に、移転元の棚番号と移転先の棚番号が同じであるか照合しながら並べてもらうためである。

こうして貼ったラベルや表示は合わせて約2,000枚。職員が新しい書庫に入って作業できるようになったのが平成27年7月、移転の開始が9月初旬。この表示作業は2か月間で行った。

移転作業の開始



そして9月1日、いよいよ書庫資料の移転が始まった。9月16日までは資料室が休室のため資料の利用がなく、利用者がレンガ棟・アーチ棟への移転経路に入ることもないので、その間に利用が多い資料から移転を行った。作業は朝9時30分から夕方5時まで、約30台のブックトラックをフル回転して行い、移転元・移転先には職員が交代で立ち会った。

9月17日に児童書研究資料室がアーチ棟2階に開室してからは利用者の通路と資料の移転経路が重なるため、警備員を配置して利用者に危険がないよう、通行の妨げにならないよう気を配った。また利用できない資料をなるべく少なくするため、今まさに移動中の資料群に限り、その日利用できない資料として毎日児童書研究資料室に掲示した。以前から書庫資料移転の周知をしていたおかげもあってか、利用できない資料に申込みが入ることはあまりなかったが、それでも申込みが入ったときには「申し訳ありませんが移動中なので」と説明をしてお断りした。開室以後は当然職員はカウンターに入るのだが移転の立会いも必要だったので、日々カウンターと立会いに追われることになった。

こうして作業は10月まで2か月弱続き、移転した資料の総延長は1km強。東京本館に仮置きしていた資料も国際子ども図書館に戻して、書庫資料の移転作業は10月20日に予定どおり無事終了したのである。

(えぐち まき 資料情報課)

第2回フィリピン国立図書館児童図書館員会議に参加して

北村 弥生

フィリピン国立図書館児童図書館員会議は、10月が子どもの月であることを記念して、フィリピン国立図書館が、2012年から毎年開催している全国的な児童図書館員のための会議である。当初はフィリピン国内の図書館員のための会議として開催されていたが、2014年からは海外から講師を招く国際会議となっており、今回の会議が国際会議として2回目の開催であった。会議では、海外からの発表者4名(マレーシア、シンガポール、韓国、日本)を含め、児童図書館サービスについて8件の発表が行われ、フィリピン国内の図書館関係者約250名が出席した。

今回のテーマは、“Sustaining Children’s Services through Improved Coherence and Integration with the Aid of Networking/Collaboration” (ネットワークと協力により一貫性と一体性を強化することによる児童サービスの継続) であった。筆者は、日本からの報告者としてこの会議に出席し、「児童書専門図書館」「子どもと本のふれあいの場」「子どもの本のミュージアム」という3つの基本的役割に沿って国際子ども図書館の概要と協力事業を紹介した。マレーシアのング・コ・コン (Ng Kok Keong) 氏は、おはなし会についての講義と実演を行った。シンガポール国立図書館のヘン・ホエイ・ビン (Heng Huey Bin) 氏は、シンガポール国立図書館が公共図書館・学校図書館と共同開発した、コンピューターゲームを取り入れた読書活動推進プログラムを紹介した。韓国国立子ども青少年図書館長の呂渭淑 (Yeo Wee Sook) 氏は、韓国国立子ども青少年図書館の児童サービスを紹介した。

フィリピン国内からの報告では、フィリピンにおける児童図書館サービスはまだ十分な水準ではないとの前提に立ち、子どもたちの読書活動推進のために公共図書館と学校図書館の連携の重要性を強調する報告が多かった。子どもたちの教育のため、識字率を高めるために図書館が必要である、書店が少ないフィリピンの島

では図書館こそが子どもが本と接する唯一の場である、といった報告がある一方で、紙の本を中心とした従来型の図書館サービスは柔軟性に欠けており、21世紀のサービスとしては不十分である、インターネットやコンピューター技術を利用したメディアリテラシー教育こそが子どもたちにとって重要であり、図書館は、そのサービスとしてメディアリテラシー教育を積極的に取り入れるべきである、という内容の報告もあり、その落差に非常に驚きを感じた。

閉会式に先立ち、フィリピン国立図書館の職員によるおはなし会と人形劇の実演が行われた。おはなし会は、本を読み聞かせる形式ではなく、図書館員が着ぐるみをまわってストーリーに沿った劇を行うものであった。おはなし会・人形劇共に、各地の図書館から参加した図書館員たちが熱心にビデオの撮影をしていた。

懇親会等での話によれば、フィリピンでは、公共図書館にはほとんど児童書がなく、児童サービスの中心は学校図書館であるとのことであった。フィリピン国立図書館でも、改修前の状態では児童サービスのコーナーは非常に限られたスペースしかなく、国立図書館の児童サービスは、図書館のない各地を訪



フィリピン国立図書館の職員によるおはなし会

問しておはなし会や人形劇を実施し、読書の楽しみを伝える活動が中心であるとのことであった。フィリピン国立図書館員の努力に感じ入るものがあった。

国際会議とはいえ、発表者への表彰や、懇親会での各図書館グループによるハワイアンダンスの発表等があり、とてもアットホームで楽しい会議参加となった。

(きたむら やよい 企画協力課)

講演会「オランダの子どもの本—小さな子どもに大きなテーマを差し出すとき」—マリット・テルンクヴィスト・人と作品

長山 さき

はじめに

2015年11月13日、スウェーデンとオランダでイラストレーター及び作家として活躍するマリット・テルンクヴィスト（Marit Tornqvist）氏の講演が国際子ども図書館で開かれた。2015年9月末に刊行された『おねえちゃんにあった夜』



（シェフ・アールツ著、徳間書店）の翻訳者として、わたしは通訳を務めさせていただいた。

子ども時代からイラストレーターへの道

1964年、マリットは、スウェーデンのウプサラ大学で言語学を教えるスウェーデン人の父と、アストリッド・リンドグレーンなどスウェーデン文学を翻訳するオランダ人の母のもとに生まれた。5歳のとき、父がアムステルダム大学の教授となり、オランダに引っ越した。スウェーデンの森に別荘をもつ一家は、夏休みには自然のなかで暮らした。電気も水もなく、湖で体を洗う。森で拾い集めたもので工作をしたり、自分で人形の家を作ったりしたことが、のちの創作活動の下地となった。

引っ越した当初、オランダ語がまったく話せず、学校でいじめにもあったものの、スウェーデンの森での家族との暮らしはしあわせに満ち溢れていた。それを心から楽しむ一方で、世界には不幸が存在することを意識する多感な子どもでもあった。それゆえ、悲しいストーリーの物語を好んで読んでいたという。将来、自分がそんな立場になったときに戸惑わないよう、心の準備をしていたのだそうだ。

きれいな絵を描けば、いじめていた子どもたちも感心し、受けいれてくれるという小学校での体験もあり、ますます熱心に絵を描くようになったマリットは、高校卒業後、アムステルダムの芸術大学ヘリット・リートフェルト・アカデミーに進学。折しもパンクの全盛で、不法占拠した空き家や街でドラッグに溺れる学友たちをよそに、ひとりスケッチにいそしんだ。卒業後はすぐにオランダ、スウェーデン両国でイラストの仕事を得られるようになり、23歳ですでにアストリッド・リンドグレーンの絵本のイラストも手がけた。

『赤い鳥』

二人の娘が幼いころに、リンドグレーンの『赤い鳥』を描いた。当時、3歳の長女と一緒に森を散策中、ヘビの死骸を見つけた。はじめて〈死〉を目のあたりにした長女は考えこみ、マリットに質問を投げかけた。すべての動物は死ぬのか、人間も死ぬのか、となりのおじさんやおばあちゃんも死ぬのか、という問いののち「子どもが死ぬこともある？」と。死ぬこともあるけれどめったにない、というマリットの答えに、彼女はこう言った。「もしわたしが死んだら、ママのおなかのなかに赤ちゃんが来るの。わたしとまったくおなじ赤ちゃんよ……そしてもしママが死んだら、わたしはあるところに行って、そこにはお母さんがいるの。そのお母さんはママとおなじよ」

その特別な会話からマリットが学んだのは、子どもには自分自身で答えを出したい問いがある、ということだった。幼い娘が懸命に考え出した答えは、奇しくもリンドグレーンが『赤い鳥』に描いた世界とおなじであった。

肝心なのは、大人が子どもに教えることよりも、大人と子どもがむずかしい問題について話し合う機会をつくることだ、とマリットはこのとき、実感する。

人間のための絵本



『Wat niemand had verwacht』Marit Törnqvist 作、Querido, 2009

1993年、私生活において孤独を感じていたマリットは、自分自身のための日記のように一連の絵を描きはじめた。海の杭の上に棲む孤独な少女の物語はのちにオランダで出版され、野坂悦子氏の翻訳で『愛についてのちいさなおはなし』¹として日本でも人気を得た。

自らのイラストに文をつけた『Wat niemand had verwacht (だれも思いもしなかったこと)』²は野原のまんなかにあいていた深い穴に落ちてしまった少女の物語。最初は多くの人が少女を助けようと試みるが、しだいに諦めてしまう。だが1人だけ、自分のセーターを穴に投げて少女をあたため、穴の淵で音楽を奏で、さいご

まで支えつづけた男性がいた。ようやく穴から出ることができたとき、かつて心配してくれた大勢の人はだれも彼女のことを覚えていなかったが、少女は心の支えだった男性を探しにいく。

男性と少女が出会ってしあわせになることをほのめかすエンディングではあるものの、どんな長い梯子も届かない深い穴に落ちるとするのは怖い。読者の想像力をかきたてる優れた絵本として、日本での出版を待ち望む声も高いなか、2016年5月現在、まだ出版は決まっていない。

マリットはこれまで何度もこの2冊の絵本をオランダの小学校で読み聞かせ、子どもたちと感想を話し合ってきた。〈孤独〉は幼い子どもにもさまざまな形で存在するものだし、シリア難民の受け入れといった社会問題に関しても、子どもは自分なりの考えをもっているものだ(穴に落ちた少女を助けようとするが、次第にあきらめ、忘れてしまうのは、現在の難民問題に通じている、とマリットは考える)。

¹ 小峰書店、1998。原題は『Klein verhaal over liefde』。

² 邦訳なし

その上、柔軟な心をもつ子どもたちは、大人が暗く感じる話のなかにも容易に希望を見出すこともできる。人生について、孤独や死といった概念について、社会について、12歳前後の子どもたちと興味深い話し合いができることに、毎回、新鮮な驚きを感じるという。

マリット自身が編集者に「これは大人のために出版するの？ それとも子どものため？」と尋ねたとき、「(大人と子ども両方の) 人間のために出すんだよ！」と答えてくれたそうだ。

日本でも今後、〈児童書〉という枠を越え、大人と子どもがともに絵本を楽しむようになることが望まれる。

『おねえちゃんにあった夜』



『おねえちゃんにあった夜』
シェフ・アールツ 文
マリット・テルクヴィスト 絵
長山さき 訳、徳間書店、2015

ベルギー、フランダース地方の作家シェフ・アールツの作品へのイラストの依頼を受け、その作品を読んだマリットは、すぐにこれがシェフ自身の物語であることを感じ取った。主人公の男の子が生まれる前に亡くなったおねえちゃんと、ある夜、自転車で冒険にいく物語だ。変色した写真でしか知らなかったおねえちゃんとの楽しくもせつないサイクリング。おねえちゃんがかつてよくあそんでいた公園で、とつぜん、男の子は深い悲しを感じる。それはたとえどんなに両親が明るくふるまっていても、家に染みついている拭い去れない悲しみだった。男の子はその体験により〈死〉と両親のことをいままでよりも理解できるようになった。

シェフに見せてもらった写真をもとに描いた〈おねえちゃん〉と、フランダースに取材旅行をして描いた風景。シェフの母親は出版記念の席でマリットから1冊目を手渡され、自らの悲しみが美しい絵本となったことに涙を流した。シェフとその

家族にとって、大きな意味をもつ絵本となっただけでなく、本書は多くの人の心に触れ、それぞれの物語を引き出した。娘の友だちの母親からマリットは、いままで1度も聞いたことのなかった亡くなった息子の話を聞いたという。小学校や図書館で子どもたちは本書をきっかけに、身近で体験したさまざまな死について語り、共感し合い、理解を深めている。

おわりに

海外に版權が売れて、世界中で読んでもらえることも大きな喜びだが、なによりも嬉しいのは子どもたちが絵本を読んだあとに、自らの話を語り出すことにある——マリットはそう講演を結んだ。

質疑応答では会場から、日本では集団としての考えを重んじ、大人も子どもも個人的で感情的な話をするのがむずかしい、という意見が出た。それに対してマリットは、オランダの学校でも子どもたちの話を引き出せるか否か、話された事柄をどれだけ深く話し合えるかは、担任の技量によるのだ、と話した。

文化的に話し合いを重んじるオランダでもけっして容易ではないことを、日本でおこなっていくには長い時間を要する。その助けとして、深い感受性で〈人間〉に訴えかけるマリットの作品が、今後ますます読まれることを翻訳者として願っている。

(ながやま さき オランダ文学翻訳家)

国際子ども図書館リニューアル記念講演会「イギリスの絵本作家 エミリー・グラヴェット―絵に生きる」

中島 尚子

エミリー・グラヴェット (Emily Gravett) 氏は、イギリスで最も優れた絵本作家に贈られる、ケイト・グリーナウェイ賞を2回受賞した実績を持つ気鋭の絵本作家である。氏の卓抜した画力、アイデアあふれる装幀や製本、意外性のあるストーリーや場面展開は世界的に高く評価され、特に、様々な動物の生き生きとした表情に仮託して、心情の機微をユーモラスに表現する手法は国境を越えて共感を呼び、日本語に翻訳されている本はまだ多くないにもかかわらず¹、日本国内にも多くのファンが存在する。

平成28年2月、国際子ども図書館がイギリスから招へいし、グラヴェット氏の初来日が実現した。そして、宮城県図書館、大阪府立中央図書館及び大阪国際児童文学振興財団と協力して、21日、24日、27日に、東京・宮城・大阪で講演会を行い、25日には、宮城県亘理町立荒浜小学校を訪問して子どもたちとの交流イベント、また、28日には大阪府立中央図書館において小学生向けワークショップを行った。

以下、グラヴェット氏招へいの概要について紹介する。

2月21日 東京講演会

東京では、国際子ども図書館アーチ棟1階研修室1で講演会を実施し、93名の参加者を得た。

グラヴェット氏は、多彩な自作イラストを用いて、子ども時代、反抗期、青春時代、出産、そして絵を本格的に学び始めた学生時代と、自身の半生とその間の絵との深い関わりについて紹介した。途中、実物投影機を用い、空想で絵を描くことと実物を観察して描くことの違いを実演して見せ、子どもの頃から物をよく観察して

¹ 既刊は『オオカミ』（原題：Wolves、小峰書店、2007）、『もっかい！』（原題：Again！、フレーベル館、2012）の2冊。来日後、『へんてこたまご』（原題：The Odd Egg）が4月にフレーベル館から刊行された。

絵を描いてきたことが現在の創作活動を支えていること、更にデジタル機器で即時に情報を得られる現代の子どもたちにとっては、じっくり物事を観察することは特に重要であると述べた。

続いて、氏は作品の内容、製作の技法・意図・プロセスについて語った。『Wolves』は当初大学の課題として製作され、同時に出版社のコンペに応募したところ賞を獲得し、出版に至った作品である。本作品中、当時の大学の課題であったメタフィクションの要素をどのような手法で表現しているかを解説したほか、製作過程で作られるストーリーボード、キャラクターの習作やダミー本、さらにコンピューターを活用したコラージュ技法等、絵本製作の舞台裏についても詳しい紹介があった。

最後に、絵本はストーリーと絵で構成され、読者がテキストとイメージを頭の中で融合させて理解するメディアであること、大人が子どもに絵本を読み聞かせることは両者の間の対話を生み、子どもが世界を理解していく過程で非常に有効である、また、大人は子どもが1人で読書することを急かさず、ぜひたくさん読み聞かせをしてほしいと結んで講演を終えた。

また、質疑応答で、参加者から子どもへのメッセージを乞われると、子どもたちには絵本を解釈したりせず、純粋に楽しんでほしいと述べた。

2月24日 宮城講演会

宮城講演会は、せんだいメディアテークのオープンスクエアで開催され、ほぼ定員一杯の289名の参加者を得た。講演は東京と同様の内容であったが、会場の参加者からは笑い、感嘆、共感の声が絶えず聞かれ、会場全体に一体感があふれる会となった。講演後、参加者を代表して、仙台在住の詩人、星乃ミナ氏が対談形式でグラヴェット氏に質問を行い、終始和やかな雰囲気の中で講演会は成功裏に終了した。

2月25日 亘理町立荒浜小学校交流イベント

講演会翌日、東日本大震災で津波の被害を受けた宮城県亘理町立荒浜小学校を訪問し、子どもたちとの交流イベントを行った。5・6年生との交流イベントの冒頭、

歓迎の意を込めて、5年生が荒浜小学校伝統の和太鼓を演奏し、グラヴェット氏も初の和太鼓演奏を楽しんだ。その後、グラヴェット氏が英語で『Wolves』を、同校教員が日本語で『オオカミ』を、子どもたちに交互に読み聞かせた。氏は、絵本中のオオカミの生態に関する客観的なテキストと、絵から読み取れるウサギの心情の変化とのギャップについて丁寧に説明し、テキストとイメージを想像力で組み合わせ、行間を感じ取る面白さを子どもたちに伝えた。

次に、『Little Mouse's Big Book of Beasts』²をテーマとして、1・2年生との交流イベントを行った。グラヴェット氏が絵本から何を感じるか問いかけ、子どもたちが答えるという形式で絵本を鑑賞した。その後、子どもたちは、あらかじめ用意されたグラヴェット氏デザインのネズミ形の紙帽子に、色を付けたり、折り紙を貼ったりしながら、ネズミを怪獣に変身させる工作を楽しんだ。

最後に行った3・4年生との交流イベントでは、4年生が地元民謡「えんころ節」を歌い、歓迎の意を表した。その後、グラヴェット氏から『Again!』、教員から『もっかい!』を交互に読み聞かせた。質疑応答の際、子どもから「どうしたら絵がうまくなるの?」と質問があり、それに対して氏は、「毎日、よく観察して、たくさん絵を描いて練習し、頭の中に情報の図書館を作ること。絵の情報がたくさん蓄積されたら、想像で描いたときにも、前に練習した成果を頭の中から引き出して再現できる。」と述べ、励ました。

沿岸部に位置する荒浜小学校を辞去し仙台空港へ向かう間、車窓から必然的に津波が残した被害の痕跡を目にすることとなり、グラヴェット氏が深い感慨を抱いた様子は非常に印象的であった。これら宮城県内におけるイベントの報告は宮城県図書館ホームページで公開されている³。

2月27日 大阪講演会

講演会の会場となった大阪府立中央図書館多目的室には定員一杯の80名が来場

² 邦訳なし。

³ <http://www.library.pref.miyagi.jp/latest/events/afterreport/698-emilygravett-lecture-and-fellowship-with-children.html>

し、満席となった。グラヴェット氏はリラックスして臨み、参加者の反応も非常に良かった上に、参加者からの質問を質問票で受け付け、大阪国際児童文学振興財団担当者が整理して講師の内面や創作姿勢に触れる質問をしたことにより、質疑応答で深く講演内容を掘り下げることができ、聴きごたえのあるものとなった。講演会終了後にはサイン会が行われ、サインを求めるファンの長蛇の列ができた。

2月28日 ワークショップ

大阪府立中央図書館多目的室において、小学生27名を対象とし、絵本製作のワークショップが行われた。

ワークショップは、画用紙2枚を綴じ合わせて小冊子を作り、子どもたち自身が考えたキャラクターを主役にして見開きで3場面の絵本を作るという内容であった。子どもたちが描画やストーリー作成に取り組む間、氏は子どもたちの間を回って助言し、子どもたちの製作を見守った。最後に、子どもたちは自作の絵本を披露し、それぞれの良いところについてグラヴェット氏からコメントをもらってワークショップは終了した。

なお、大阪における講演会及びワークショップの様子は、大阪国際児童文学振興財団が記録を作成し販売している⁴。

グラヴェット氏の滞在期間中、3都市で計5回のイベントを実施し、非常に多くの児童文学関係者、図書館関係者、子どもたちに氏の作品と絵本の楽しさを伝えることができた。宮城講演会の参加者から、「東京に行かなくてもいいように、地方での講演会を積極的に行ってほしい。」という要望もいただき、国際子ども図書館が地方に対して、より広く、より積極的に子どもの本との出会いの場を提供していくことに大きな期待があることが分かった。

同時に、初来日のグラヴェット氏に、東京のほか、宮城・大阪へも足を運んでいただいたことで、国境を越えて氏の作品が多くの人々に受け入れられていることを

⁴ http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/05_publication/index.html

知ってもらえた。加えて、母国イギリスのメディアではあまり報道されないという、東日本大震災の津波被害の現状を含め、今の日本の姿を紹介できたことにも大きな意義があったのではないだろうか。

一連のイベントを通じ、日本全国に向けて積極的に海外の児童書・絵本関連の情報を届けること、日本国内の子どもや子どもの本を巡る状況を海外に発信すること、そして国際的な相互理解を深めることに対して当館が負う責務の大きさを改めて実感する好機となった。

本事業の実施に当たっては、宮城・大阪の関係諸氏に多大な御尽力、御協力をいただいた。末尾ながら深く感謝申し上げる。

(なかじま なおこ 企画協力課)

平成27年 4 月から平成28年 3 月までの主なできごと

平成27年

- 4 月23日 電子展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」追加公開
- 4 月25日 講演会「私が子ども時代に出会った本—下重暁子、森絵都、片川優子」
- 5 月 5 日 子どものためのこどもの日おたのしみ会
- 5 月30日 イベント「ボンジュール！フランス絵本のひろば」
- 7 月 1 日 アーチ棟引渡し
- 7 月25日 夏休み読書キャンペーン2015（～ 8 月30日）
- 7 月31日 「教員のための博物館の日」に参加
- 8 月 4 日 展示会「世界をつなぐ子どもの本—2014年国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト図書展」（～ 8 月23日）
- 8 月 6 日 夏休み小学生向け図書館見学ツアー（8 月13日、20日とも）
夏休み小学生向けおはなし会（8 月13日、20日とも）
- 8 月 9 日 あいうえの冒険隊第 1 回（国際子ども図書館・東京都美術館）
- 8 月18日 日中韓子ども童話交流2015見学
- 8 月31日 メディアふれあいコーナー廃止
- 9 月 1 日 第一資料室・第二資料室休室（～ 9 月16日、16日閉室）
- 9 月 1 日 書庫資料移転（～10月20日）
- 9 月13日 あいうえの冒険隊第 2 回（東京文化会館）
- 9 月16日 国際子ども図書館新館完成記念式典
- 9 月17日 児童書研究資料室開室
- 9 月26日 講演会「＜児童文学史＞をもとめて—展示会「日本の子どもの文学」の 5 年間をふりかえる」
- 10 月11日 あいうえの冒険隊第 3 回（東京文化会館・上野公園・東京都美術館）
- 10 月15日 児童文学講演会「子どもの居場所—アストリッド・リンドグレンが残したもの—」
- 10 月31日 展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」最終日
- 11 月13日 講演会「オランダの子どもの本—小さな子どもに大きなテーマを差し出すとき」
- 12 月 1 日 世界を知るへや休室（～ 2 月29日）

平成28年

- 1 月 5 日 子どものへや休室（～ 2 月29日）
- 2 月 2 日 児童書ギャラリー、調べものの部屋開室

- 2月21日 講演会「イギリスの絵本作家 エミリー・グラヴェット―絵に生きる」
- 2月24日 講演会「イギリスの絵本作家 エミリー・グラヴェット―絵に生きる」(せんだいメ
ディアテーク)
- 2月25日 宮城県亘理町立荒浜小学校でのエミリー・グラヴェット氏と児童の交流イベント
- 2月27日 講演会「イギリスの絵本作家 エミリー・グラヴェット―絵に生きる」(大阪府立中
央図書館)
- 2月28日 ワークショップ「イギリスの絵本作家 エミリー・グラヴェットさんと絵本をつくろ
う！」(大阪府立中央図書館)
- 3月1日 子どものへや・世界を知るへやリニューアル開室
- 3月22日 国際子ども図書館リニューアル記念展示会「現実へのまなざし、夢へのつばさ：現代
翻訳児童文学の半世紀」(～7月24日)
- 3月26日 子どものための絵本と音楽の会『ぐるんぱのようちえん』
- 3月27日 国際子ども図書館リニューアル記念展示会関連講演会「翻訳という魔法のメガネ―海
外児童文学受容の50年」

活動報告

(平成27年4月1日～平成28年3月31日)

1. 児童書専門図書館としての活動

1.1 資料・情報センターとしての機能

(1) 蔵書構築

国内刊行児童書を納本制度により収集したほか、未収の国内刊行児童書（竹久夢二（編）『どんたく絵本.1』等）、国内外の児童書関連資料、児童サービス用資料、学校図書館セット貸出用資料、主要児童雑誌の欠号等を収集した。

外国刊行児童書については、*Mon tout petit*（Germano Zullo著、Albertine 絵）をはじめとする2015年ボローニャ国際児童図書賞（ボローニャ・ラガッツィ賞）の受賞作及び入選作品等を含む欧米や中国、韓国等資料のほか、平成26年度に作成した選書用ブックリストに基づくペルーの児童書を重点的に収集した。また、平成27年度はチェコ語の児童書・関連書について木村有子氏に選書用ブックリストの作成を依頼した。

加えて、ボローニャ国際児童図書展事務局からボローニャ国際児童図書賞応募作品310冊の寄贈を受けたほか、国際図書館連盟（IFLA）から「絵本で世界を知ろうプロジェクト」により集められた絵本42冊を貸出用資料として寄贈を受けた。

資料の破損・劣化対策として、ステープラー綴じ資料の錆による紙の劣化を予防するため、100冊を糸で綴じ直した。

(2) 情報サービス

○国立国会図書館サーチにおける児童書総合目録の提供

国立国会図書館サーチを通じ、国立国会図書館（国際子ども図書館を含む。）、大阪府立中央図書館国際児童文学館、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、日本近代文学館、東京都立多摩図書館、梅花女子大学図書館、白百合女子大学図書館及び白百合女子大学児童文化研究センターが所蔵する児童書・関連資料の所蔵情報を一元的に検索できる児童書総合目録を提供している。児童書に限定した検索、都道府県立及び政令指定都市立図書館蔵書・各種デジタル資料・レファレンス情報等の同時検索が可能である。平成27年度は、東京都立多摩図書館のデータ更新を行った。

※ <http://iss.ndl.go.jp/>

○国立国会図書館蔵書検索・申込システム（NDL-OPAC）への目録データ追加等

新規受入児童書資料（朝鮮語385件、アラビア語143件、ペルシア語51件、中国語35件、ヘブライ語7件、ウズベク語2件、ヒンディー語2件）及びアラビア語児童

書資料（平成19年以前受入）の目録データを追加した。

児童書専門付加情報として、日本図書館協会から提供された『選定図書目録』平成25年分の内容解説データ及び日本児童図書出版協会から提供された『児童図書総目録』の内容解説データ、計2,744件を投入した。また、平成26年1月から平成27年9月末までに整理された新規国内刊行児童書データ3,918件に件名を付与した。

※ <https://ndlopac.ndl.go.jp/>

○レファレンス協同データベースへの事例提供

各種図書館からのレファレンス事例等をレファレンス協同データベースに登録しており、平成27年度は55件の児童書に関するレファレンス事例を追加し、平成28年3月末現在、467件を提供している。

※ <http://crd.ndl.go.jp/jp/public/>

○外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報

日本の児童書の海外における翻訳出版情報のデータベースである。国立国会図書館職員が調べものに有用であると判断した各種情報源を国立国会図書館ホームページで紹介するリサーチ・ナビ内で提供している。平成27年度は65件のデータを追加し、平成28年3月末現在の収録データは3,982件となった。

※ <http://rnavi.ndl.go.jp/childbook/honyaku.php>

(3) 利用者サービス

○来館利用サービス

平成27年9月17日、第一資料室と第二資料室を統合し、児童書研究資料室を開室した。児童書研究資料室には、約4万冊の児童書・児童文学に関する参考図書・研究書等を排架している。また、利用者用端末を21台配備し、各端末から資料検索、書庫資料の閲覧申込み・複写申込書の作成のほか、デジタル化資料等電子情報の閲覧が可能である。平成27年度の第一資料室及び第二資料室と児童書研究資料室の利用者数は合計10,965名であった。

○遠隔サービス

国際子ども図書館所蔵資料の遠隔複写、図書館間貸出しの申込み及び蔵書に関する問合せに回答するレファレンスサービスを行っている。回答事例の一部はレファレンス協同データベースで紹介している。平成27年度の遠隔複写申込みは779件、図書館間貸出数は329点、文書によるレファレンス回答処理は220件、電話によるレファレンス回答処理は1,126件である。

(4) 国会サービス及び行政・司法の各部門に対するサービス

○国会サービス

調査及び立法考査局を窓口として、資料の閲覧・貸出し・複写・レファレンス等を行っている。平成27年度は73点を出納した。

○行政・司法の各部門に対するサービス

国際子ども図書館では東京本館・関西館と同様に、各府省庁及び最高裁判所に設置されている支部図書館27館に対して、資料の貸出し等を行っている。平成27年度の相互貸出し数は32点である。

1.2 子ども読書活動推進の支援

(1) 子どもの読書に関する情報発信の強化及びネットワークの構築

○「子どもの本と図書館の動き」¹

ホームページの「子どもの本と図書館の動き」で、国内外の主な児童文学賞、子どもの読書と図書館に関するニュース等を紹介している。平成27年度には国内外合わせて100件の情報を掲載した。

○「東日本大震災と子どもの読書についての情報」

平成23年4月1日から、東日本大震災と子どもの読書に関する情報へのリンク、国や図書館関連団体の動き、被災した子どもたちを支援するための活動等を紹介している。平成27年度は5件の情報を掲載した。

(2) 人材育成支援

○講師の派遣

平成27年度に、公共図書館、図書館関係団体等の依頼により、2件の研究会・研究会等の講師として、延べ2名の職員を派遣した。

(3) 学校図書館支援

○学校図書館セット貸出し

「国際理解」をテーマとする児童書等約50冊を1セットとし、全国の学校図書館へ貸し出している。ホームページに全17種類の各セットの資料のリストや解題を掲載し、セットを使った学校図書館活動や学習・読書活動の事例を全国から集め紹介している。平成27年度は224校に計10,790冊の資料を貸し出した。そのうち、東日

¹ 平成28年度からは、「子どもの本に関するニュース」というページに再構成し、統合して提供している。

<http://www.kodomo.go.jp/info/index.html>

本大震災の被災地支援として、被災地域の学校49校に計2,281冊を往復送料無料で貸し出した。また、子どもたちが推薦する本を紹介した手紙を同封し、次に利用する学校にセットと共に届ける読書郵便を79校へ送付した。

2. 子どもと本のふれあいの場としての活動

2.1 子どもの成長段階に応じた館内サービス

○子どものためのおはなし会

毎週土曜日・日曜日の午後2時（4歳～小学1年生）及び午後3時（小学2年生以上）に「おはなしのへや」で実施した（平成27年12月まで）。平成28年1月から2月までは「子どものへや」リニューアル工事のため休止し、3月は毎週土曜日のみ実施した。職員が、ストーリーテリングと絵本の読み聞かせ等を行っている。平成27年度は計161回実施し、1,168名が参加した。

○ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会

3歳以下の子どもと保護者を対象として、毎月第2水曜日及び第3土曜日午前11時から「おはなしのへや」で実施した（平成27年12月まで）。平成28年1月から2月の間は休止し、3月は第2水曜日に実施した。職員が、参加者の年齢に合わせ、絵本の読み聞かせとわらべうたを組み合わせで行っている。平成27年度は合計19回実施し、260組533名が参加した。

○夏休み読書キャンペーン

夏休みに子どもが様々な本に出会うための企画として、本を読んで問題に答える、初級編・中級編・上級編の3種類のクイズを用意し、「子どものへや」で実施した。715名の子どもが参加した。

○夏休み小学生向け図書館見学ツアー

8月6日、13日、20日の午後2時から2時50分まで、小学生向けの図書館見学ツアーを行った。内容は、館内見学と質疑応答で、計67名の参加があった。

○夏休み小学生向けおはなし会

8月6日、13日、20日の午後2時50分から3時10分まで、小学生向けの図書館見学ツアー終了後に、自由参加のおはなし会を実施した。計82名の参加があった。

○子どものためのおたのしみ会

通常のおはなし会の特別版として、5月5日に、大型絵本の読み聞かせを含む「こどもの日おたのしみ会」を2回実施し、計78名が参加した。

○幼稚園・保育園・小学校向けの見学

幼稚園・保育園・小学校、団体向けの見学を行った。幼稚園・保育園にはおはなし会、小学生向けには館内見学とおはなし会を合わせたプログラム、特別支援学校には児童に合わせた手遊びやわらべうたを含むおはなし会プログラムでそれぞれ行った。平成27年度はリニューアル工事のため4月～6月のみ実施し、計7件294名の参加があった。

○中高生向けの見学・体験

中学校、高等学校向けの見学を行った。職業インタビューを中心とする館内見学を実施し、平成27年度は、計23件241名の参加があった。

2.2 子ども向けの情報発信

ウェブ上の子どもと本のふれあいの場として公開する「国立国会図書館キッズページ」の「よんでみる？」のコーナーにコンテンツを追加した。

※ <http://www.kodomo.go.jp/kids/index.html>

3. 子どもの本のミュージアムとしての活動

3.1 館内展示

○日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み

平成23年2月19日からレンガ棟3階本のミュージアムで開催した標記展示会が、平成27年10月31日に終了した。開催日数1,348日、入場者数は延べ256,085人（1日平均190人）であった。当館所蔵資料の中から、明治から現代に至るまでの代表的な日本の児童文学作家・画家の作品、国語教科書掲載作品、童謡作品等、常時約270点を展示した。また、特別コーナーを設けて半年ごとに展示替えを行い、延べ展示冊数は約1,000点となった。

関連催物として、9月26日にアーチ棟1階研修室1において講演会「＜児童文学史＞をもとめて—展示会「日本の子どもの文学」の5年間をふりかえる」（講師：藤田のぼる氏、宮川健郎氏）を開催した。参加者は70名であった。

○現実へのまなざし、夢へのつばさ：現代翻訳児童文学の半世紀

国際子ども図書館の増改築及びサービスの全面リニューアルを記念して、標記展示会を平成28年3月22日から7月24日まで、レンガ棟3階「本のミュージアム」で開催している。当館では平成12年に開館記念展示会「子どもの本・翻訳の歩み展」を開催し、明治期から1960年代までの翻訳児童文学を時系列で紹介した。今回は、その後継企画として、1970年代以降に邦訳された翻訳児童文学約300冊を展示した。

関連催物として、3月27日に講演会「翻訳という魔法のメガネ—海外児童文学

受容の50年」(講師：川端有子氏)をアーチ棟 1 階研修室 1 において開催した。当日は、川端氏の体調不良により、急遽国際子ども図書館職員による原稿の代読となった。参加者は74名であった。

○世界をつなぐ子どもの本—2014年国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト 図書展

レンガ棟 3 階ホールにおいて、平成27年 8 月 4 日から 8 月23日まで計17日開催し、入場者数は4,304名であった。資料は国際児童図書評議会 (IBBY) の日本支部である日本国際児童図書評議会 (JBBY) から借用し、2014年の国際アンデルセン賞受賞者の著作、IBBY オナーリストの作品及びその邦訳書、合わせて約170冊を手にとって見られるよう展示した。

○資料室での小展示

第一資料室では、当館開催展示会に関連した小展示を 1 回実施し、利用者の興味・関心を深める一助とした。また、平成26年に日本国内の主要な児童文学賞を受賞した作品及び児童サービスの基本資料を展示した。

第二資料室では、当館所蔵外国刊行資料から、「くま、クマ、熊！」(クマの絵本)等利用者が親しみやすいテーマで児童書を中心に資料を選び、小展示を 2 回実施した。

児童書研究資料室の開室以降は、従来二つに別れていた資料室が一つに統合したことを生かし、日本語と外国語の資料を用いた「国際アンデルセン賞を受賞した日本の作家と画家」を実施した。また、新たに読書活動推進支援コーナーを設置し、児童サービスの基本資料を通年で展示した。当館で開催する展示会に連動した小展示を期間中に 1 回実施したほか、平成26年に日本の主要な児童文学賞を受賞した作品を通年で展示した。

○子どものへやでの小展示

「子どものへや」では季節や子どもの興味を引くテーマで、「世界を知るへや」では主に開催中の展示会に関連させて小展示を行い、子どもたちが何度訪れても楽しめる工夫をしている。平成27年度は「子どものへや」で 9 回、「世界を知るへや」で 2 回行った。

3.2 電子展示会

○日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み

平成26年度インターネットで公開した標記電子展示会について、「第 6 章 21 世紀の子どもの本」及び「児童文学者コーナー」を追加した。全体で約450点の資料、

20件のコラム、約400点の画像を掲載している。

※ <http://www.kodomo.go.jp/jcl/index.html>

4. 内外諸機関との連携・協力、広報活動等

○各国大使館との連携イベント

●イベント「ボンジュール！フランス絵本のひろば」

5月30日、在日フランス大使館との共催で、フランスの絵本を紹介するイベントを開催した。84名の参加があった。

●児童文学講演会「子どもの居場所—アストリッド・リンドグレンが残したもの—」

10月15日、『長くつ下のピッピ』生誕70周年を記念し、スウェーデン大使館との共催で、アストリッド・リンドグレンの作品を中心に、スウェーデンの児童文学をテーマとする講演会を開催した。94名の参加があった。

●講演会「オランダの子どもの本—小さな子どもに大きなテーマを差し出すとき」

11月13日、オランダ王国大使館との共催で、オランダの絵本作家マリット・テルンクヴィスト氏による講演会を開催した。76名の参加があった。

○あいうえの冒険隊

東京藝術大学、東京都美術館及び東京文化会館との共催により、小学生を対象として、絵本、美術及び音楽を総合的に体験する標記ワークショップを次のとおり実施した。初回は、当館で絵本を鑑賞して自分が「なりたいもの」をイメージした後、「なりたいもの」になるための衣装を製作した。2回目は声と体で「なりたいもの」を表現することをテーマとして、グループに分かれてパフォーマンスを創作した。3回目は上野公園でパフォーマンス及びパレードを行い、作り上げた作品を披露した。参加者は20名であった。

【月日及び会場】

8月9日 国際子ども図書館、東京都美術館

9月13日 東京文化会館

10月11日 東京文化会館、上野公園、東京都美術館

○講演会の実施

●講演会「私が子ども時代に出会った本一下重暁子、森絵都、片川優子」

講師：下重暁子、森絵都、片川優子（作家）

日本ペンクラブとの共催により、標記講演会を4月25日に国立国会図書館東京本館で実施した。参加者は166名であった。3名の講師が子どもの頃に読み親しんだ作品の紹介を挟みつつ、自らの読書体験を語った。座談会形式の講演では、時代を反映する多彩な作家について言及され、各講師の読書体験の一端を窺い知れる内容となった。

●講演会「イギリスの絵本作家 エミリー・グラヴェットー絵に生きる」

講師：エミリー・グラヴェット（画家・絵本作家）

通訳：田村かのこ（英語通訳者）

下記のとおり講演会及び関連イベントを実施した。宮城県におけるイベントは宮城県図書館と、大阪におけるイベントは大阪府立中央図書館及び大阪国際児童文学振興財団との共催で行い、合計466名の参加者を得た。

【月日及び会場】

東京講演会	2月21日	国際子ども図書館
宮城講演会	2月24日	せんだいメディアテーク
東日本大震災被災小学校における交流イベント		
	2月25日	宮城県亘理町立荒浜小学校
大阪講演会	2月27日	大阪府立中央図書館
ワークショップ	2月28日	大阪府立中央図書館

※ 本誌61～65ページ参照

○国立科学博物館「教員のための博物館の日」への参加

7月31日に国立科学博物館で開催された「教員のための博物館の日2015」に参加した。教員を対象にしたリレートークの中で、国際子ども図書館概要やリニューアル、平成28年2月開室の「調べものの部屋」について紹介した。

○一般向けの見学

個人向けのガイドツアーを毎週火・木曜日に行っているほか、団体向けの見学を行っている。平成27年度は、リニューアル工事のため9月から2月までは休止したが、個人向け11件85名、団体向け5件98名の参加があった。

○平成27年度に刊行した主な刊行物

- 『国際子ども図書館の窓』第15号（2015年9月）
- ※ http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_9501886_po_2015-mado.pdf?contentNo=1&alternativeNo=
- 『平成26年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「児童文学とそのマルチメディア化」』（2015年9月）
- ※ http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_9501588_po_H26-full.pdf?contentNo=1
- 国際子ども図書館メールマガジン 86～102号（2015年4月～2016年3月）
- ※ <http://www.kodomo.go.jp/about/mailmagazine/2015/index.html>

5. 施設及びサービスの拡充

平成24年2月に建築を開始したアーチ棟は、平成27年6月末に竣工した。アーチ棟は、地上3階、地下2階、延床面積6,090m²の規模である。地下1階・2階は収蔵能力約65万冊の書庫となり、既存のレンガ棟書庫と合わせて、105万冊規模の収蔵が可能となった。アーチ棟の2階では、レンガ棟の旧第一・第二資料室を統合した「児童書研究資料室」を開室し（平成27年9月17日）、調査研究のための専門図書館としての機能強化を図った。また、アーチ棟1階には、講演会・各種研修・子どものためのイベント等を開催する研修室を、3階には事務室を設置した。

レンガ棟2階に、中高生の調べものに役立つ資料を開架する「調べものの部屋」と、資料を手にとって見ることができる「児童書ギャラリー」を開室した（平成28年2月2日）。レンガ棟1階では、改修に伴い休室していた子どものへやと世界を知るへやを再開した（平成28年3月1日）。また、「休憩・飲食・授乳スペース」を新設した（平成27年11月4日）。

増築・改修工事後のサービスの在り方に関する基本文書としては、次の文書を策定しているので参照されたい。

- ※ 国際子ども図書館第2次基本計画
<http://www.kodomo.go.jp/about/law/basicplan2.html>
- ※ 国立国会図書館国際子ども図書館子どもの読書活動推進支援計画2015
<http://www.kodomo.go.jp/promote/suishin2015.html>

数字で見る！国際子ども図書館

(平成27年 4 月 1 日～平成28年 3 月31日)

(1) 国際子ども図書館所蔵統計 (平成28年 3 月31日現在)

資 料 区 分			所蔵数
資料 情報課	図書 (単位：点)	日本語 (＊1)	280,493
		外国語 (＊2)	97,116
		中国語・朝鮮語資料	19,960
		アジア言語資料 (中国語・朝鮮語資料以外)	9,784
		欧米言語資料	67,515
	計		377,609
	逐次刊行物 (単位： タイトル、 カッコ内 は点)	国内雑誌	1,656 (89,680)
		外国雑誌	185 (9,646)
		計	1,841
	非図書資料 (単位：点)	マイクロ資料 (マイクロフィルム、マイクロフィッシュ等)	38,000
		映像資料 (ビデオディスク、ビデオカセット等)	7,975
		録音資料 (オーディオディスク、カセットテープ等) (＊3)	2,738
		機械可読資料 (光ディスク等)	6,587
		楽譜資料	283
		カード式資料 (カルタ等)	11,389
		静止画資料 (紙芝居等)	21,014
		点字・大活字資料 (＊4)	64
	計		88,050
	開架閲覧用資料 (単位：点) (＊5)		18,274
	児童書ギャラリー		1,849
	貸出用資料 (単位：点)		365
児童 サービス課	開架閲覧用資料 (単位：点)		26,650
		子どものへや・世界を知るへや	17,263
		調べものの部屋	9,387
	貸出用資料 (単位：点)		5,655

- ＊1 児童書関連書 (2006年 9 月以前選書分12,565点) を含む。
- ＊2 児童書関連書を含む。言語別の所蔵数の計は業務基盤システムによる採取のため、外国語の所蔵数と一致しない場合がある。
- ＊3 教師用指導書のみ。
- ＊4 点字教科書のみ。
- ＊5 日本語の児童書関連書 (2006年10月以降選書分) と児童関連誌、児童書ギャラリー用資料。

(2) 来館者統計

開館日 (日)	287
来館者 (人)	99,381
(うち中学生以下)	(20,263)

(4) 資料出納統計

国会サービス (点)	73
第一・第二資料室 (点)	10,185
児童書研究資料室 (点)	12,959

※第一・第二資料室は、平成27年8月で休止し、9月17日から児童書研究資料室に統合して開室。

※メディアふれあいコーナーは、平成27年8月で廃止。

※児童書ギャラリー・調べものの部屋は、平成28年2月に開室。

(3) 各室利用統計

第一資料室	開室日 (日)	102
	利用者 (人)	3,286
第二資料室	開室日 (日)	102
	利用者 (人)	1,659
児童書研究資料室	開室日 (日)	149
	利用者 (人)	6,020
子どものへや・ 世界を知るへや	開室日 (日)	242
	利用者 (人)	48,423
メディアふれあい コーナー	開室日 (日)	123
	利用者 (人)	18,313
児童書ギャラリー	開室日 (日)	47
	利用者 (人)	5,927
調べものの部屋	開室日 (日)	47
	利用者 (人)	7,018

(5) 複写サービス統計

(対象：国会サービス)

紙	件	12
	枚	60
プリント アウト	件	0
	枚	0
マイクロ	件	0
	フィルム (コマ)	0
	フィッシュ (枚)	0

(対象：一般)

紙	件	5,054
	枚	30,363
プリント アウト	件	514
	枚	16,013
マイクロ	件	0
	フィルム (コマ)	0
	フィッシュ (枚)	0

(6) 資料貸出統計

(対象：行政・司法各部門)

相互貸出し (点)	32
-----------	----

(対象：一般)

図書館間貸出し	点	329
学校図書館セット貸出し	件	224
	点	10,790
展示会出品資料貸出し	件	3
	点	921

(7) レファレンスサービス統計①

(対象：一般)

文書回答	処理文書 (通)	113
	処理 (件)	220
電話回答	受理 (件)	853
	(うち18歳未満)	(1)
	処理 (件)	1,126
	(うち18歳未満)	(1)
口頭回答	受理 (件)	9,683
	(うち18歳未満)	(1,061)
	処理 (件)	12,034
	(うち18歳未満)	(1,498)

(7) レファレンスサービス統計②

(対象：国会サービス)

文書回答	処理文書（通）	0
	処理（件）	0
電話回答	受理（件）	0
	処理（件）	0
口頭回答	受理（件）	0
	処理（件）	0
調査局経由※	処理（件）	1

(対象：行政・司法各部門)

文書回答	処理文書（通）	0
	処理（件）	0
電話回答	受理（件）	2
	処理（件）	7
口頭回答	受理（件）	0
	処理（件）	0

※調査及び立法考査局で受付後、回付されたものの。

(8) 参観・見学統計

国会議員、前・元議員		件	1
		人	9
その他の国会関係者		件	0
		人	0
行政・司法		件	1
		人	2
国内	個人	件	54
		人	457
		(うち18歳未満)	(60)
	団体	件	53
		人	981
		(うち18歳未満)	(593)
	図書館関係者	件	19
		人	169
		(うち18歳未満)	(0)
	地方自治体・地方議会関係者	件	3
		人	11
		(うち18歳未満)	(0)
海外（外国公館関係者を含む）		件	10
		人	45
		(うち18歳未満)	(0)

(9) 国際子ども図書館ホームページアクセス統計

http://www.kodomo.go.jp/ 以下の全コンテンツ	ページビュー（件）	2,591,651
トップページ	トップページへのアクセス（件）	314,935

国際子ども図書館利用案内

国際子ども図書館ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>

電話 03 (3827) 2053 (代表) 03 (3827) 2069 (録音による利用案内)

☆来館利用 ホームページ > 利用案内

問合せ先：企画協力課

開館時間：9:30～17:00 資料請求：9:30～16:30（児童書研究資料室）

複写受付：10:00～16:00（後日郵送複写のみ16:30まで）

休館日：月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日は開館）、年末年始、毎月第3水曜日

所蔵資料：国内刊行児童図書・雑誌、外国語の児童図書・雑誌、児童書関連図書・雑誌等

※資料の利用は館内のみ。館外への帯出はできません。

☆レファレンス・資料案内 ホームページ > 本・資料を探す > レファレンス・サービス

問合せ先：資料情報課情報サービス係

申込方法：来館、文書（図書館経由）、電話

※児童書・児童文学、児童図書館活動等に関する問合せに答えます。

※資料を直接確認しなければならない等時間を要する調査及び聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンス等は文書で申し込んでください。

☆資料の複写（有料） ホームページ > 利用案内 > 複写サービス

問合せ先：資料情報課情報サービス係

申込方法：来館、NDL-OPAC 経由（登録利用者・機関のみ）、郵送（登録利用者・機関のみ）

☆資料の図書館間貸出し ホームページ > 利用案内 > 図書館間貸出し

問合せ先：資料情報課情報サービス係

※「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみ利用できます。

※雑誌や昭和25年以前刊行の図書等貸出しができない資料もあります。

☆見学・体験（調べもの体験プログラム） ホームページ > 利用案内 > 見学・体験

問合せ先：企画協力課広報係（一般向け）

児童サービス課（幼稚園・保育園・小学生向け、中高生向け）

☆学校図書館セット貸出し ホームページ > 子どもの読書活動推進 >

学校図書館へのサービス > 学校図書館セット貸出し

問合せ先：児童サービス課児童サービス企画係

※「国際理解」をテーマとする児童書約50冊を学校図書館に貸し出します。

※セットに含まれる資料の解題をホームページに掲載しています。

国際子ども図書館の窓 第16号 2016.9

発行所	国立国会図書館 2016年9月25日発行
編集責任者	国立国会図書館国際子ども図書館長 本吉 理彦
〒110-0007	東京都台東区上野公園12-49
	電 話 03 (3827) 2053 (代表) FAX 03 (3827) 2043
印刷所	株式会社 山越

本誌掲載論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。

本誌掲載記事を全文又は長文にわたり抜粋して転載する場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課に御連絡ください。



The Window

the journal of the International Library of Children's Literature

No.016 September 2016

Contents

【Highlights】

Renewal and New services of the International Library of Children's Literature (ILCL)	=Shigeru Matsuura	3
Expansion and arrangement of the ILCL: The construction of the Arch Building and the refurbishment of the Brick Building	=Facilities Management Division, Administrative Department, National Diet Library	11
Exhibition commemorating renewal of the ILCL: "Facing the Reality, Soaring in the Fantasy: Fifty years of modern Japanese translations of children's books from abroad"	=Hatsuki Nishio	21
Opening of the Researchers' Reading Room	=Resources and Information Division	28
Opening of the Teens' Research Room	=Maki Tsutsumi	33
Can "the smartphone generation" enjoy finding information by using non-digital tools? : attempts of the research practice program	=Yu Funakushi	40
Opening of the Gallery of Children's Literature	=Resources and Information Division	46

【Column】

Transfer process of the materials in the stacks at the ILCL	=Maki Eguchi	51
Report of the 2nd International Conference on Children's Librarianship at the National Library of the Philippines	=Yayoi Kitamura	54
Lecture: "Children's books in the Netherlands: big themes for small people", Marit Törnqvist, the personality and the works	=Saki Nagayama	56
Lecture commemorating renewal of the ILCL: "Emily Gravett-Living in Pictures"	=Naoko Nakajima	61
【List of events and activities; April 2015—March 2016】		66
【ILCL activity report】		68
【ILCL in figures】		77
【ILCL user guide】		80

NATIONAL DIET LIBRARY
Tokyo